２０１９年１２月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１９日(木)、ＮＨＫ仙台拠点放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、ひとモノガタリ「木をつなぐひと」も含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　藤村　ゆき（(株)健康米味楽農場　代表取締役）
副委員長　坂田　裕一（ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター 理事長）
委　　員　相原　和裕（河北新報社　論説委員会委員長）
桂木　宣均（日本地下水開発（株）代表取締役社長）
佐藤　美嶺（防災士）
鷹山ひばり（七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長）
南條　和恵（仙台大学柔道部女子監督）
西内みなみ（桜の聖母短期大学　学長）
八代　浩久（東北電力株式会社　取締役　常務執行役員）

（主な発言）

＜ひとモノガタリ「木をつなぐひと」（総合　１１月４日(月)放送）について＞

○　後継者が見つからないリンゴ畑を一時的に預かり育てる試みを行う高橋哲史さんを中心に、リンゴを一緒に育ててきた息子を亡くした久保田矩子さん、夫に先立たれた高屋朋子さんなどの人間模様が描かれていた。自分に与えられた人生を懸命に生きていく姿を見せてもらい感銘を受けた。三者三様、人生それぞれあっても、リンゴの木を守りたいという思いが伝わり胸が熱くなった。高齢の夫婦が地域の人に頼んで畑を畳むためにおよそ 200 本の木が切り倒されたが、その中で若い木だけ切らずに地域の人が別の場所に移して育てることになった。リンゴの木に対する思いを引き継いでいくその思いに共感した。自分の生き方も考えさせられるような番組だった。

○　番組の冒頭が、台風情報の流れるラジオの音と急いで収穫する高橋さんたちの姿で

始まっていたので引きつけられた。俳優の時任三郎さんによる語りも、全体の雰囲気によく合っていてよかった。青森県弘前市で後継者の見込みの立たない農家の割合が６２％で、５年で１４％も悪化しているという背景が前段で紹介されたので、番組で取り上げた人たちが特別ではなく、どの農家にも起こり得ることだと思った。息子を亡くした久保田さんの畑で高橋さんが「二人がどういうふうに畑をやっていたかが目に浮かんだ気がした」ということばが印象的だった。画面のリンゴの畑の中に久保田さん親子が作業をしている風景が見えた気がした。また、畑を畳むためも 200 本ものリンゴの木を伐採する中で、若い木を切らずに別の場所に移して育てようとする場面に驚いた。同じ地域に暮らす人だからこその気持ちだと思う。地域全体に昔から刻まれてきたリンゴの木への思いを強く感じた。リンゴ農家にとってリンゴの木は思いの詰まった家族のような存在で、その木を誰かが手入れをしてくれるということが心の支えになっていると感じた。高橋さんの会社の若いスタッフの方々が、一緒に仕事をしてどのように感じているのかも聞いてみたかった。

○　「ひとモノガタリ」という柔らかいタイトルと番組の内容が合っていてとても温かい気持ちになった。高橋さんが身を削っても木をつなぐことに献身的に取り組んでいることが番組全体を通して分かった。弘前市で後継者の見込みが立たない農家の割合が６２％という現実、リンゴの木が育つまでに２０年から３０年かかるという事実、息子を亡くしてもリンゴの木を残したいという母親の思いなど、それぞれのストーリーが数珠のようにつながれて物語が完成していてとても感動した。昨今、技術の進歩でさまざまな業務で無人化や効率化が進み、利益が優先される世の中で、誰かの役に立ちたいという思いを持って生きることの大切さを見せてもらった気がする。青森という大地に根差して生きている人の物語が丁寧な取材を元にして描かれていて感動した。

○　弘前市で５年間で 500 を超えるリンゴ農家が廃業していることや 200 本のリンゴの木が切り倒されている様子を番組で見て、農業の高齢化、後継者問題、日本の農業を取り巻く厳しい環境が押し寄せていることを実感した。近年、高橋さんのような若手の農業経営者が、意欲を持って農業に取り組んでいることがさまざまな場面で紹介されているが、高橋さんの「木をつなぐ」という取り組みは新しいと感じた。「木をつなぐ」という取り組みの裏には、家族や親子の愛情というテーマも見えてきた。高橋さん自身も母親の思いを受け継いでリンゴ農家を引き継いでおり、また久保田さんの息子さんが、母を思って作業しやすいように畑を作っていたエピソードなどもとても印象的だった。ただ、高橋さんの「大赤字でした」ということばもあったように、経営状態についてもう少し説明があってもよかったのではないか。思いと現実のギャップをもう少し描いてほしかった。

○　リンゴの産地とリンゴ農家の大変な現状を消費者に知ってもらうという意味で、非常に有意義な番組だったと思う。青森のリンゴ農家を消費者として支援したいと思った視聴者も多かったのではないかと思う。高橋さんが実ったリンゴを両手でくるむようにくるっと回す場面が印象に残った。太陽の光を当てて均等に色づくようにしていたと思うがリンゴに対する思いが伝わるいい場面だった。高橋さんにリンゴ畑の管理を委託した農家の高齢の女性たちの思い、農家の家族の歴史などが丁寧に描かれていて共感できた。リンゴの栽培は、手作業が多く手間暇がかかるため、年間通じて休む暇がないと聞く。高橋さんは、受託しても赤字だが、次の人につなぐために活動しているが、思いだけではどうにもならない現実もあると思う。若い従業員の様子も描かれていて、将来に希望が持てる部分もあったので少しほっとした。

○　高橋さんと高橋さんにリンゴ畑を委託している農家のさまざまな状況が丁寧に取材をされていて、リンゴ農家の苦労や一生懸命頑張る姿がしっかり描かれていたと思う。日本のリンゴは海外の富裕層に人気が出てきていることや第二次産業としてジュースや酒に加工して販路を拡大することや観光と絡めて第三次産業としても育成できる可能性もありながら、なぜ後継者がいないのかという点を疑問に思った。すぐれた技術を持っているのに後継者がいない中小企業にはさまざまな支援策が出されている。すばらしい商品を生産できるリンゴ農家にも行政がしっかりとした支援策を出すべきだと思う。就職支援や農業体験など、農家の後継者になろうとする人への取り組みが必要だと思う。感情的・感傷的に訴えるだけではなく、日本の産業をどのようにこれから育成していくべきかも考える番組を期待している。

○　後継者不足の問題がある中で、リンゴの木をどうやって守っていくかという前向きな志を持つ男性のとてもすてきな「ひとモノガタリ」だった。時任さんの語りも番組の雰囲気に合っていて引き込まれた。高橋さんが人のために、日本のために木をつなぐ取り組みをしていることに感動した。印象に残ったのは、息子の死から１週間で高橋さんのもとに駆け込み、畑の栽培を委託することを決めた久保田さん。絶望のふちにいるはずなのに、リンゴの木を守るための行動からその強い思いが伝わってきた。どの農家の方もリンゴの木に対してまるで自分の子どものように接していた点も印象的だった。日本の果物は、海外に比べるととてもおいしいと思う。日本人の手作業のすばらしさや繊細さ、思いやりの心を持って育てることが食べ物をおいしくしているのではないかと改めて感じた。高橋さんの会社でリンゴ栽培について学んでいる若い人が登場したが、県外から来ているのか、どのような人なのか気になった。後継者不足に悩むリンゴ農家を救う方法はないのか、もう少し踏み込んだ話しも聞きたかった。

○　さまざまな理由でリンゴの木を手放す人のつらい思いや、人と人のつながりがリンゴの木をつないでいることが伝わり心を打たれた。後継者不足は、リンゴ農家に限ったことではなく、農業全般に言えることだと思う。先祖代々の土地を手放さなければならなくなったときにどのような救済措置がとれるのか。高橋さんの木をつなぐ取り組みは重要だと思うが、農業全体から見るとどのような位置にあるのかというところまで掘り下げてほしかった。高橋さんはモデル的な存在だと思うので、この取り組みについてもっと全体像が分かるように描いてほしかった。

○　高橋さんは、後継者が出てくる保証がないまま木をつなぐ取り組みを始め、この先どうなっていくのだろうかと大変興味深い内容だった。リンゴの木の枝を見て、農家がどんな思いで育てていたのかを読み取る高橋さんの姿に人の痛みや人生を背負ってリンゴの木を守っていることが伝わり胸が熱くなった。高橋さん自身、一度都会に出てから母親の病を機に農家を継ぐ決意をしているので、その人生経験が今の活動につながっていることがよくわかった。高橋さんの目の力強さは、志の高さの表れのように感じた。「先人に試されているような気がする」ということばも心に響いた。高橋さんは、まだ成功例にはなっていないと思う。誰か手を貸す人は出てきたのか。高橋さんの活動を番組を通して伝えたことで、賛同者が一人でも出てきてほしいと思った。

○　経済界で最大の問題の一つが「事業承継」だと感じている。農業においても同じような状況で、後継者不在の農家が６２％もいるということは、経済界以上に大きな問題であることを知った。「木をつなぐひと」の存在は地域にとって大きな意味があると思う。リンゴの木と岩木山の映像がとても美しく、地域と共に成長する実感を持つ事ができた。もう少し地域の現状を知るために番組で紹介すれば良かったと思う事が２点ある。１点目は産地間競争について、青森県のリンゴの出荷額をデータで示せば、もっと青森のリンゴ農家の現状が際立ったのではないか。もう１点は、高橋さんの家族のことなど背景をもう少し丁寧に描いていれば、もっと視聴者は感情移入しやすかったのではないかと思う。高橋さん自身が「大赤字」と言っていたが、それでもなぜ木をつなぐ取り組みを続けられるのか、単なる思いだけではなく経済面も描いていればもっと引きつけられたと思う。

（ＮＨＫ側）

今回の番組をどのように２９分にまとめるか考える中で、
題材はリンゴ農家だが、農家だけはなく日本全体で起こって

いる後継者不足の問題と重なるのでそこを意識して制作した。
後継ぎがいないために先祖代々受け継いできた大切なものが
失われていいのかという問題意識を前面に出したいと思った。
高橋さんの取り組みが経済的に成り立っているのかという点
や、行政の支援策、若い従業員のことなどについては今後も
丹念に取材していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１２月１４日(土)の「大好き・東北　定禅寺しゃべり亭～たんぽぽ～」を見た。お笑いコンビ「たんぽぽ」の白鳥久美子さんは、福島県出身で東北の人にとって親しみがある。川村エミコさんはこけし好きの「こけ女」で東北６県のこけしを通して地域の生活・文化のことを紹介していてとてもよかった。人選がよかったと思う。とても温かい雰囲気で、二人の人柄が東北の暖かさに溢れていて、会場と一体となってさわやかな番組なっていた。今まで見た「定禅寺しゃべり亭」の中で一番よかったのではないかと思う。

○　１２月１５日(日)の東北ココから「なつかしの味“えごま”でふるさとを元気に～福島・浪江町～」(総合 前8:25～8:52 東北地方)を見た。帰還困難区域になった浪江町でえごまの栽培をしていた女性が、別の場所での栽培を余儀なくされながらも、また浪江町に戻って栽培を続ける様子は、たくましさを感じさせてくれた。台風１９号の襲来で思うように収穫はできなかったが、じゅうねん餅を作って振る舞い、食べた人が笑顔になったのが印象的だった。収穫した後の葉や殻などは地面に戻して地力をつけさせるなど、この先もいろいろな取り組みによってふるさとの復活、復興に向けて力を尽くしていくことが伝わる非常にいい番組だったと思う。

○　１２月１３日(金)やまコレ「山形のテレビを語ろう」(総合 後 7:30～7:57 山形県域)を見た。山形各地のさまざまな分野で活躍する視聴者が参加し、ＮＨＫや民放にこだわらずに、「山形のテレビ」についてざっくばらんに語り合っていた。「好きなアナウンサー」「好きな番組」という質問に対して、民放のアナウンサーや番組が上位に上がっていたり、民放の番組も映像で紹介するなどとてもチャレンジングな番組だったと思う。今後のテレビへ期待することについては、地方の人材不足が指摘される中で、地方にも仕事のやりがいや働きがいがある仕事がたくさんあることをメディアでもっと取り上げてほしいという意見があった。視聴者はメディアの力に期待していることを実感した。

○　青森県で午後６時１０分から放送している「あっぷるワイド」は、いつもおもしろく感心して見ている。「いまほん」というコーナーがとても参考になっている。また、気象コーナーは、若い気象予報士が担当しているのだが、なかなか慣れないのかハラハラする場面がある。焦らないでうまくできるように応援しながら見ている。プロとしてもっと落ち着いてやってほしいと思う。

○　１１月１４日(木)のクローズアップ現代＋「日本酒が“世界酒”に～ＳＡＫＥ革命～」を見た。冒頭にアフリカのウガンダで酒を売り込む岩手県にある老舗酒蔵の５代目蔵元である久慈浩介さんが登場した。久慈さんはアメリカでも酒造りのアドバイスをしているパワフルな人で、このような人がいることで、日本酒業界もこれから変わっていくのだと思った。日本酒は今では、アメリカやカナダ、フランスなど海外にも醸造所があることが紹介され日本酒の将来性を感じさせられた内容だった。

ゲストでソムリエの田崎真也さんが「世界中で飲まれるようになると、日本国内の生産量では圧倒的に足りない時代が来ますね」と言っていた。東北は日本酒の醸造と原料の米を提供する農業、どちらも大事な産業なので、世界中で飲まれる時代が早く来てほしいと思わせる紹介の仕方だった。

また、高級シャンパンの元最高醸造責任者のリシャール・ジェフロワ氏が、日本で日本酒づくりを始めたということに驚いた。日本酒をブレンドして究極の日本酒造りに取り組んでいるということで非常に興味深かった。

○　１２月１５日(日)のクローズアップ現代＋選「追跡！ネット広告の闇　水増しインフルエンサー」(総合 前 1:35～2:06)と「追跡！ネット通販　やらせレビュー」(総合 前 2:06～2:36)は、とても衝撃的な内容だった。ＳＮＳの世界でフォロワー数が売買されていたり、やらせレビューが急増していたりするなど、インターネットの闇について明らかにする内容で、海外取材も含めて、とてもすばらしい取材力で驚かされた。一方で、大手インターネット企業に国が法的な規制をかけて、こうした問題が起こらないようにきちんと対策をとってほしいと思った。また、ネットリテラシーの教育がとても重要だということを改めて感じた番組だった。

○　「大河ドラマ　いだてん～東京オリムピック噺（ばなし）」を見た。大河ドラマとしては非常に冒険だったと思う。最初の回と最後の回を見ると、見事につながる内容で、芝居の舞台に近いと感じた。舞台は、時をずらしたり、行ったり来たりして人間関係をつなげたり、エピソードもいくつか重層的に混じり合っていくがそれに近いと思った。ドラマでは、分かりにくい部分もあったが、最後に全てがつながった。2020年の東京オリンピックまでつながっていくと暗示する内容でとてもよかった。

○　「大河ドラマ　いだてん～東京オリムピック噺（ばなし）」を見た。明治、大正、昭和という近現代を大河ドラマでやるのは非常にチャレンジングだったと思うが、１年間、楽しく見た。ノンフィクションとフィクションをうまく織り込んだ脚本がすばらしく、ＶＦＸなどの映像技術で、過去の映像と現代の映像を巧みに組み合わせる手法もマッチしていたと思う。戦後１９年しかたっていなかった日本でオリンピックに挑戦しようとしたエネルギーの大きさをこのドラマを通して感じることができた。ただ、登場人物の多さ、落語やスポーツ、政治も絡むため、頭が混乱することもあった。総集編も楽しみにしている。2020 年の東京オリンピックの盛り上げにつながる時期に合わせて放送してほしいと思った。

○　１２月１日(日)から８日(日)「体感　首都直下地震ウイーク」について、ＳＮＳを使って実際に視聴者から投稿できる作りになっていて、さまざまなことが勉強できる内容だった。首都直下地震について、これだけの大きなプロジェクトで放送するのは思い切った試みで、多くの人が首都直下地震について考える機会になったと思う。番組がスタートするときに企画意図を丁寧に説明していたので、視聴者も自分の身に起こり得ることだという気持ちにさせられたと思う。ドラマで再現したことによって、数字を見たり聞いたりするよりも、わが事として捉えやすくなっていたと思う。民放は途中にＣＭが入るので、現実に戻されるが、ＮＨＫは最初から最後まで途切れずに見られるので、緊迫感を保ったまま見ることができた。ドラマの中で起きた被害をキーワードにしてドラマが終わった後に一つ一つ丁寧に解説が入っていたのもよかった。二次被害について専門家が考えた「被災ツリー」も興味深く、今後のさまざまな対策に活用できるのではないか。最終日に平時にできる備えとして住民の活動や企業の取り組みが紹介されていたが、社会全体で取り組んでいくために何をしたらいいのかという具体的な行動のヒントが得られたと思う。

○　１２月１日(月)から８日(日)「体感　首都直下地震」について、木造住宅密集地の火災、避難する人や帰宅する人が将棋倒しになる群衆雪崩、地震の影響で堤防が決壊するなど、巨大都市東京特有の地震災害を詳細にシミュレーションしていたので、改めて危機感を持った人も多いと思う。さらにその上で被害を最小限に食いとめる方策、専門家の提案や意見がたくさん紹介されていて、非常に啓もう的な内容だったと思う。あとはどれだけ国、自治体、企業、住民が一致して事前の防災に取り組めるかだと思う。たくさんのことばを尽くすよりも映像で見せたほうが記憶に刻まれて忘れないという効果があると思う。ＢＳなども使って、何度か再放送する価値のある番組だった。ドラマ「パラレル東京」は、物語として引き込む力を持っていたので、１本にまとめて放送してもらいたい。首都直下地震に警鐘を鳴らし続けてほしい。

○　１２月７日(土)のブラタモリ「花巻～花巻はなぜ宮沢賢治を生んだ？～」を見た。宮沢賢治がなぜ生まれたかという点は、さまざまな番組で取り上げられるが、完全だというものはないと思う。一部分については、どういう取り上げ方をしても当たっているが全体像は見えない、というのが宮沢賢治の実像だと思う。今回は、非常に軽いタッチで取り上げていたので、花巻という土地が賢治に影響を与えていたことが伝わってきた。ただ、案内人に花巻の人が少なかったのが残念だった。また、タモリさんの知識の豊かさには驚かされた。もう少し宮沢賢治の人柄や作品について、深く入っていく内容でもよかったように思った。

○　１２月１６日(月)の鶴瓶の家族に乾杯「祝！結婚　壇蜜と秋田県秋田市ぶっつけ本番旅！」を見た。秋田市の紹介で、あきた舞妓、竿灯のほかに秋田犬も挙げられていたが、秋田市の紹介としては唐突に感じた。鶴瓶さんや壇蜜さんが町なかを歩きながら、偶然の出会いを楽しみ、新しい名物料理や工房を訪ねていたので地域の良さが伝わったのではないか。会話の中から秋田の県民性がよく出ていたと思う。壇蜜さんが子どもや高齢者に接する様子が物腰柔らかで、優しく好印象だった。

○　１２月９日(月)の逆転人生「町工場が大躍進　転倒減らす介護シューズ」を見た。病気や高齢になって自分に合う靴がなくて困っている人は多いと思う。今回紹介された靴製造会社は、左右で別のサイズを選んで購入できるなどその人に合った靴を提供している。高齢者の歩き方を研究し、試行錯誤の末、高齢者がつまずかないで歩ける靴を開発していった。靴を実際に使用した人からの感謝の手紙が届き、それを励みにまた頑張る姿から、感謝のことばがどれだけ大きな勇気を与えるのかということを感じさせられた。

○　１２月１５日(日)の目撃！にっぽん「元受刑者　“再生”への日々」を見た。受刑者を積極的に雇用し、社会復帰に向けた支援や教育を行う企業の代表で、長年にわたって保護司を務めた副島勲さんを半年間追いかけたドキュメンタリー番組だった。社員２７名中１１名が元受刑者で、副島さんが毎朝社員全員に声かけをして、決して見放さないというメッセージを伝えて、復帰のチャンスを与えているということが非常に印象的だった。何よりも、受刑者本人が犯した罪の深さへの気づきを促しているところがすばらしいと思った。社会復帰しても、その罪が消えるわけではなくて、生涯自分の犯した罪を背負い続けなければならないが、そこを支援し続けていることが大切だと言うことが伝わってきて感動した。「反省は一人でできる。でも、更生は一人ではできない。誰かが支えなければならない」という副島さんのことばが印象的だった。元受刑者の社会復帰について、行政の取り組みや支援体制はどのようになっているのかも紹介してほしかった。早朝ではなく多くの人が見やすい時間帯に放送し

てほしい。

○　１１月２９日(金)のあしたも晴れ！人生レシピ・選「逆境を乗り越えるコツ！“レジリエンス”に注目」（Eﾃﾚ 後 8:00～8:44)を見た。人が突然の病や災害、仕事や人間関係のストレス、近親者の死などの困難な状況に陥ったときにしなやかに適応して生き延びる力、回復力に着目した番組だった。レジリエンスの勉強会が開かれていることや医療機関にレジリエンス外来があることなど最近の事情が分かった。実際にレジリエンス外来を受診して立ち直った女性の紹介があり、最後には病気になる前よりも非常に楽しく暮らしているということばが出るほど前向きになっていて驚かされた。また、東京電力福島第一原子力発電所の事故で家も土地も失った一家が、前を向いて暮らしを再建させたケースも伝えられてとてもよかった。

番組構成もスムーズで、それぞれの体験をされた方のコメントも非常に印象的で、改めて人間のレジリエンスについて考えさせるいい番組だった。

○　１１月２２日(金)のＢＳ１スペシャル「僕が性別“ゼロ”になった理由」（ＢＳ１ 後 11:00～11:49)を見た。性同一性障害について「知っているつもり」の人が多い日本の現状は世界の潮流と大きな隔たりがあるので、ＮＨＫがこの問題を取り上げる意味は大きいと思う。９年間にもわたる青年への長期取材もＮＨＫの真骨頂ではないかと思う。性同一性障害に対する社会の認知度は、９年前と今では大きな違いがあることがよく伝わってきた。今回の番組の主人公である小林さんが女性から男性へ、そして男性から「Ｘジェンダー」へ移ろっていくのも、この問題の複雑さを示していたと思う。７８歳でカミングアウトした八代みゆきさんが男子校の同窓会で、もみくちゃにされる場面では、社会の断層を改めて感じた。これから社会が成熟するためにも「ジェンダーとは何か」を追求し、啓もうしてほしい。

○　１１月２９日(金)のＢＳ１スペシャル「ローカルだけじゃもったいない！全国オモシロ番組選手権」（ＢＳ１　後 11:00～11:50)を見た。ＮＨＫの地方局で制作された500 以上の番組の中から４つの番組が紹介された。どの番組も個性的だったが仙台局制作の番組である「みちたん」が際立っていた。審査をするのは若者 107 人で、手厳しい意見が飛び出したがディレクターが落ち着いて対応していたのがよかった。ＭＣを務めたタレントの山里亮太さんと武内陶子アナウンサーの掛け合いがとてもおもしろかった。また、審査方法もスマートフォンに入れたアプリで投票する形式だったが、その場ですぐに結果が出て、感想も入力できるのでリアルにやりとりできるので見ていてとてもおもしろかった。ほかの番組でもこの方法は使えるのではないかと思った。地域の番組の中にもおもしろいものがたくさんあると思うので、今回のような番組をまた期待している。ＢＳ１ではなく、地上波で放送してほしかった。「みち

たん」がグランプリになり特集番組を作る権利を獲得したが、どのような番組になるか楽しみにしている。

（ＮＨＫ側）

ＢＳ１は、地域の魅力や課題を取り上げる役割も担っている放送波なので、今回はＢＳ１で放送した。

○　１１月３０日(土)の奇跡のレッスン「“揺るがぬ気持ちで前へ！”　中学ラグビー」(ＢＳ１　後 7:00～7:50)、「誰かのために何かのためにその思いが人を強くする中学ラグビー」(ＢＳ１　後 8:00～8:50)を見た。印象に残ったシーンが２つあった。１つはバックスの生徒たちが何度も集中力を欠いてボールを落としてしまったときに、コーチたちが技術を教えるのではなくて、「君らが落とすことによってフォワードが体を張って守らなければならないので、友だちのためにボールを落としたらだめなんだよ」ということを伝えていたシーンだ。もう１つは、体が一番小さく初心者で補欠グループの生徒を抜擢して試合に出す場面。抜擢した理由が、練習のときにチームを鼓舞するような大きな声を出して一生懸命練習をしたからだった。生徒たちがどんどん変わっていく姿を見て、心が変わったから技術が吸収されていくのだと強く感じた。経験者が若い人にものを伝えること、教育の重要性を感じることができるいい番組だった。

○　１２月１１日(水) 昭和の選択「山本五十六　開戦への葛藤～“避戦派”提督は　なぜ真珠湾を攻撃したのか」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 8:00～8:59)と１２月１１日(水)歴史秘話ヒストリア「特攻　なぜ若者は飛び立ったのか」を見た。戦争を回顧する報道は少なくなったと思うが、責任問題も含め、大戦の検証は必要なことだと思う。「戦争から学ぶもの」「震災から学ぶもの」などの教訓は活かすべきなので、ＮＨＫではもっと近現代史を取り上げてほしい。「昭和の選択」では３人のコメンテーターが知識を披露するだけではなく、独自の視点から語っていたのが良かった。最後に小説家の真山仁さんが「山本の弱点は徒党を組むことを良しとしなかったことである」、「現代の日本においても担ぐ人が圧倒的に少ない。最後は人数がものをいう世界である以上、派閥は必ずしも『悪』ではない」と語っていたことが印象に残った。

ＮＨＫ仙台拠点放送局
番組審議会事務局

２０１９年１１月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、２１日(木)、ＮＨＫ仙台拠点放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「みちのく　頂をめざして」も含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　藤村　ゆき（(株)健康米味楽農場　代表取締役）
副委員長　坂田　裕一（ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター 理事長）
委　　員　相原　和裕（河北新報社　論説委員会委員長）
桂木　宣均（日本地下水開発（株）代表取締役社長）
佐藤勘三郎（株式会社ホテル佐勘　代表取締役社長）
佐藤　美嶺（防災士）
鷹山ひばり（七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長）
南條　和恵（仙台大学柔道部女子監督）
西内みなみ（桜の聖母短期大学　学長）
八代　浩久（東北電力株式会社　取締役　常務執行役員）

（主な発言）

＜「みちのく　頂をめざして」（総合　１１月１日(金)放送）について＞

○　東北のオリンピックの話題を集めた番組で、とても興味深かった。３つの事例を通じてオリンピアンを生む背景には教育があることが分かった。オリンピックに出場するような選手がすぐに誕生するわけではなく、何世代にも受け継がれながらその土壌ができ上がっていくのだと思った。自治体が練習場所や職場をきちんと準備することで、安心してカヌー日本代表を目指すことができたという矢澤一輝さんが、その後、指導者として後進の育成に励んでいるという青森の西目屋村の事例は、希望を与える内容だった。将来に向けての投資である教育がどれほど重要なことかをオリンピックという切り口で見せてもらった。

○　番組のタイトルから来年の東京オリンピック・パラリンピックでメダルを狙う東北

のアスリートの紹介番組をイメージしたが、いい意味で裏切られた。カヌー、レスリング、フェンシングというそれほどメジャーではないスポーツを取り上げていたが、自治体や企業、学校などに、熱意のある指導者や支持する人がいて、しっかりと地域に根づいていることが伝わってきた。東北に将来のオリンピアンが誕生するのではないかという希望を抱かせるいい構成だったと思う。さらにスポーツで地域振興に成功している東北以外の地域の事例を紹介すると、内容がより深まったと思う。

○　スポーツを取り上げた番組で、明るく、快活で、肩肘を張らずに見ることができた。「みちたん」のゆったりとした雰囲気を感じさせる内容で、インタビューやコメントもおもしろかった。西目屋村は、浅く流れの速い岩木川をいかして２０年前からカヌーで村おこしを行ってきたということだったが、どのようなきっかけで２０年前に始まったのかを知りたかった。カヌーのおかげで人口 1,300 人あまりの村が東京オリンピックのイタリアのカヌー競技のホストタウンになったという村おこしという観点からも興味深い話題だった。東京オリンピックに向けて東北での機運醸成につながる番組だった。東北ゆかりの選手を応援したくなるような番組を今後も期待したい。

○　過去の映像やあまり知られていないエピソードが盛りだくさんで、オリンピックと東北の予想外のつながりを紹介する大変おもしろい番組だった。西目屋村の映像で、岩木川を高い位置から捉え、ズームをしていくとカヌーの練習をする矢澤さんが映る場面があった。１０秒に満たない短い映像だったが、雄大な自然に囲まれていることを一瞬で印象づけるいいシーンだった。番組のメッセージとは関係はないが、番組に奥行きを出す効果があったと思う。矢澤さんが職場で同僚に愛されているさりげない日常の姿もよく取材されており、とてもよかった。西目屋村の場所を示す地図があればさらによかったのではないか。青森のカヌー、秋田のレスリング、宮城のフェンシングといった別々のエピソード３つを、ボードをバトンタッチしてつなぐ演出はいいアイデアで好感を持てた。

○　今回の番組は、スポーツになじみのない人や子どもでも見やすい構成になっていた。オリンピックに出る選手は特別だと思われているが、意外と身近にいるということが伝わる内容でよかった。レスリングで金メダルを獲得した秋田の柳田英明さんが「諦めたら負けだ」と話すシーンが印象に残った。諦めなかった人だけがオリンピックに出られることが伝わるいい場面だった。また、カヌーで村おこしをしている西目屋村の事例は、他の自治体の参考になる内容だったと思う。今回の番組や大河ドラマ「いだてん」など、東京オリンピックの機運を高める番組はとても意義があると感じている。スポーツブームにもつながってほしい。

○　東北とオリンピックの関わりを切り口にした番組でとてもよかった。いろいろな方が登場し、その人となりを映像で表現するのは難しいと思うが、本人ではなく周囲の人に語ってもらう演出は、オリンピアンを聖域化し過ぎておらずよかった。番組のところどころに出てくるイラストも非常によかった。

ただ話題のポイントを押さえる場面で「頂」という画面表示と音声が入る演出や、エピソードの転換の場面で、ボードを手渡しする演出に少し違和感があった。次は東北とパラリンピックの関わりや障害者スポーツの歴史などを取り上げてほしい。

○　オリンピックにゆかりのある東北の選手を入り口に、その競技と地域のストーリーを感じられる楽しい番組だった。西目屋村が、カヌーの練習場所や職場を準備して、矢澤さんを村全体でバックアップしている様子がすばらしいと思った。矢澤さんと村の皆さんのいい関係が周りの方の話しを通して伝わってきて、今後の指導者としての活躍やカヌーでの村おこしのゆくえについても注目したいと思った。秋田では酒蔵が生んだレスリング文化がとても興味深かった。「レスリングも酒造りもやっただけ返ってくる」ということばが印象に残った。また、宮城県の気仙沼のフェンシングの話題では、昔の写真や映像と現在の高校生が頑張っている姿が重なり、町の歴史を感じることができた。どの事例も選手が地元で一人の人間として頑張っている姿を取り上げていたので、東北の人にとってオリンピックとの距離が縮まる番組になったと思う。

○　西目屋村では、練習場所や仕事を提供するなどして矢澤さんをバックアップしており、すばらしいと思った。東京オリンピックのカヌーの日本代表選考に落選してしまったが、村にとどまって指導者として生きる矢澤さんを村が今後も温かく見守ってほしいと思った。オリンピックに出場するという目標が叶わなかった後の人生をどのように過ごすかということも大切なことだ。今回の番組を通じて、人生の大きな目標と真剣に向き合った自分を誇れる生き方をしている人たちを見て、大会を見た後にこれまでにない大きな感動を得られるのではないかと感じた。私自身もそのような生き方をしたいと思った。

○　肩の凝らない構成で、オリンピックと地域の関わりやその歴史を学ぶことができる非常に楽しい番組だった。矢澤さんは、僧侶だったがカヌーに専念するために西目屋村に移住したが、僧侶の仕事はこれからどうするのかが気になった。今後についても少し触れてほしかった。また、なぜその地域にその競技が根付いたのかという点についてもっと深く掘り下げてほしかった。国民体育大会の役割も大きいのではないかと感じている。

スポーツも、まちづくりに大きく関わっていると思う。東京オリンピックを一つの

契機に、地域の中にスポーツを生かす新たな動きにつながってほしいと思った。

○　東京オリンピックが決まったときに、東北にスポットを当てたオリンピックに関わる番組を期待していたので、今回の番組はとてもよかった。話題のポイントを押さえた場面で「頂」という画面表示が出る演出があったが、成績や活躍だけではなく、やる気や挑戦することに対しても「頂」認定していたことに好感が持てた。秋田のメダル獲得数が多いということに驚かされた。酒蔵が７０年前から選手の育成・指導に取り組んでいたという発想がすばらしいと思った。また、フェンシングというあまりメジャーではないスポーツにスポットを当てていたこともよかった。日本がボイコットしたモスクワオリンピックのフェンシング代表に選ばれていた千田健一さんのエピソードを通じて、オリンピックは政治も絡むようないろいろな側面があることが分かった。千田さんの息子の健太さんがオリンピックに出場したことで父親の夢もつないだという話には感動した。今後の番組にも期待している。

（ＮＨＫ側）

　この番組を制作するにあたり、東京オリンピックに出場するような選手を取り上げるのか、違う切り口にするのか議論した。東京オリンピックに出場する選手や目指す選手は、さまざまな番組で取り上げられる可能性があるので、東北とオリンピックの意外な関わりやエピソードを取り上げることにした。いただいた意見も参考にしながら、今後も制作していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１０月１９日（土）の大好き・東北「定禅寺しゃべり亭～大桃美代子さん～」を見た。大桃さんの「自然は脅威もあるが恵みへの感謝が大きい」ということばや地域づくり、人とのつながりを大切にする生き方に共感できた。米のとぎ方、種類ごとのおいしい食べ方などにとても詳しくて驚いた。農業に従事している人の心に添うようなことば選びがされていて、生産者を代弁してくれていた。農業全体が盛り上がってほしいという大桃さんの願いが強く感じられる番組だった。

○　１１月１５日(金)の東北ココから「想定を超える災害にどう備えるか　台風１９号から１か月　福島からの報告」を見た。今回の被害が阿武隈川の支流で起きていることについて、なぜ起きたのかをＣＧを使ってわかりやすく紹介していた。ただ、本流と支流の堤防の大きさが同じくらいに描いかれていたが、大きさが明らかに異なるた

めもう少し厳密に表現したほうがよかったのではないか。決壊を防ぐための工事には莫大な費用がかかることも分かり絶望的な気持ちになった。また、被災地に医師が入って支援活動する様子も紹介されていた。ふくらはぎの血管に血栓ができていないか検査したり、歯科医が高齢者の噛めるかたさに合わせた食事を提案するなど、専門家の支援の大切さを改めて感じた。今回の台風の被害についてふかん的に捉えて今の実情を伝えていてとてもよかった。

○　１１月１５日（金）の「東北ココから」を見た。河川防災の課題については、浸水範囲を航空写真に重ねて紹介したり、氾濫のメカニズムをＣＧで解説したりしていたのが分かりやすかった。一方、支流の整備不足という点だけがクローズアップされて受け取られてしまう恐れがあったのではないかと感じた。本流と支流は整備の方針や氾濫したときの被害の特徴も違うので、それぞれの違いをもっと説明する必要があったのではないか。また、被災者の健康管理については、エコノミークラス症候群や誤嚥性肺炎に対する取り組みが紹介されていたが、被災した人や支援する人にとって役立つ内容だったと思う。ただ、被害のメカニズムと、被災者の体調管理の重要性といった方向性の違う２つの項目が組み合わされて構成されていたことで、番組全体として何を伝えたかったのかが分かりにくかった。

○　１０月２５日(金)の東北ココから「津波避難　何が生死を分けたのか」は、宮城県石巻市で津波から生き残った 100 人の方から当日の行動を聞き取って、性別、年齢、職業などの属性ごとに分析をした番組だった。地震発生時にどこにいたか、誰といたかということが、避難行動に大きな影響を与えることがよく分かった。学校や職場にいた場合は、安全な高台にすぐに避難するケースが多いが、知人宅や外出先にいた場合は、自宅に家族を探しに戻るなど危うい行動をとることが多いことが分かった。生き残った人の貴重な証言を今後の災害時の対応に生かしていくことが大事だと感じた。

○　１１月２日（土）の被災地からの声「台風１９号宮城県吉田川流域」を見た。黙々と片付け作業を行っている様子をカメラが後ろから撮影したシーンは、被災した人の大変さが伝わる映像だった。一方、被災した方が、スケッチブックに今、伝えたいことを書いて読み上げる演出に初めは少し違和感があったが、見終わったあと、紙に書くことでよりその人の思いが伝わると感じた。中でも、「ボランティアに感謝。本当にありがとう」と話す親子が印象に残った。ボランティアの重要性が分かるだけでも大きな価値がある番組だと思った。津田喜章アナウンサーの「家財や家は思い出の象徴で、大切な人を亡くすのと同じくらいの喪失感があることを多くの人に知ってほしい」ということばが特に印象的だった。

○　１１月２日（土）のあの日　わたしは～証言記録　東日本大震災～「宮城県東松島市　伊藤礼子さん」（総合 前 9:55～10:00 東北地方向け）を見た。この番組は、当時のことを振り返って証言する内容だが、さまざまな思いもあり、何年もかけてようやく取材に応じることができた人、今だから話せる人もいるのではないかと思った。これからも続けてほしい番組だと感じた。ホームページでは、これまでの番組がいくつか見ることができるようになっているので、役に立つと思った。

○　１１月８日（金）の再発見いわて「検証・台風１９号　“同時多発豪雨”にどう備えるか」（総合 後 7:30～7:57 岩手県域）を見た。沿岸部と中山間地特有の災害のメカニズムが分かりやすく解説されていてよかった。ハザードマップで危険性が指摘されていない地域でも災害が起こる危険があることも指摘していた。同時多発豪雨の問題は、全国的な課題だと思うので、岩手県内だけでなく、全国的な課題として取り上げてほしいと感じた。後半に、専門分野ごとの解説者が複数登場したが、それぞれがどのような分野の専門家なのか分からなくなり混乱した。また、行政の担当者がどう考えているのかも聞きたかった。

○　１０月３０日（水）のＮＨＫスペシャル「天皇が創った至宝～正倉院宝物が伝える“日本誕生”～」（総合 後 10:25～11:19）を見た。正倉院宝物が細かい部分まで映し出されていて見応えがあった。これまでシルクロードを経て日本にもたらされたと考えられてきた宝物の数々が、最新の研究により、その多くが日本国内で作られたことが分かったという事実に驚いた。宝物を国内で作ることで日本を生まれ変わらせようとしていた聖武天皇の考えが伝わり、とても勉強になった。

○　１１月１０日（日）のＮＨＫスペシャル　ダビンチ・ミステリー第１集「幻の名画を探せ～最新科学で真実に迫る～」と１１月１７日（日）ＮＨＫスペシャル　ダビンチ・ミステリー第２集「“万能の天才”の謎～最新ＡＩが明かす実像～」を見た。ダビンチの５００年前の成果を最新の科学で分析していくプロセスが圧巻で、特に「糸巻の聖母」をＸ線分析する場面は感動的だった。また、ダビンチが思考の過程を記した膨大な手稿をＡＩで解析し、ダビンチの脳内を再現していた点もとても興味深かった。中でもおもしろかったのは、６０代を過ぎても知識を獲得し、発想の新たな展開をしていたところだ。通常は２０代くらいから新たな脳細胞は作られなくなっていくと言われているだけに、ダビンチのすごさを感じた。

○　１１月１０日（日）と１７日（日）の「ＮＨＫスペシャル」は、ことばに表せないほどすばらしい内容だった。ダビンチの作品の背景には、川など水が描かれていること

が多く、なぜなのか不思議に思っていた。今回の番組でダビンチが貧しい少年時代を過ごしたこと、遊び場が川だったこと、川からいろいろなメカニズムを学んだことを知ることができて、納得できた。この番組はとてもよくできているので、美術を学ぶ学生に見せる機会を作るなど、芸術への理解を深めることに役立ててみてはどうか。ただ、若いナビゲーターのことばに重みがないように感じた。もう少し人生経験を積んだ人を起用した方が深みが出たのではないか。

○　１０月２１日（月）のストーリーズ事件の涙「“１７０枚の日々”をたどる～仙台母子心中事件～」を見た。起きた事件を知るだけならばインターネットのニュースで十分だが、後追い取材を丁寧に行い、事件の全体像を描くこうした番組の役割は重要だと思う。今回は、なぜ母と子は死ななくてはいけなかったのかという点を後追い取材したことで、その背景がよく分かったと思う。いじめの問題は根深いので、今後も取材を続けて番組化してほしい。

○　１０月２３日(水)の歴史秘話ヒストリア「幻の絵画　流転のドラマ　至高の美　佐竹本三十六歌仙絵」を見た。あまりにも高価なため大正時代に絵巻を歌人ごとに切断して売ったということがドラマ仕立てで分かりやすく解き明かされていた。絵巻を切断することで、災害や戦禍から逃れられたという効果があったことや、保存のリスクの分散になったという説明もあり、納得できた。それぞれの歌仙絵が絵巻切断という事実を経て、また別の芸術作品に昇華したということが非常におもしろく、見る人にいろいろな思いを抱かせるいい番組だったと思う。

○　１１月５日（火）の美と若さの新常識～カラダのヒミツ～「撃退オヤジ臭！メンズビューティーの極意」を見た。今回は美しさというよりも、においに焦点を当てていたところがよかったと思う。においに関して、まだ気にする人はあまり多くないと感じる。においに気を遣うことは基本的なエチケットであり、もっと周りに気を遣おうという感覚が育つように訴えていくと、日本も変わってくるのではないかと思う。

○　１１月１０日(日)の 目撃！にっぽん「町にひとつの赤提灯～震災８年半　“思い”行き交う居酒屋～」を見た。宮城県東松島市で海沿いにあった野蒜地区は、８年半前の津波で大きな被害に見舞われ、高台に集団移転した。その新しい住宅地で髙橋かつ子さんが自宅を改装して開いた居酒屋が舞台だった。店に来る人たちのいろいろな物語を丹念に追いかけて、心温まるいい番組になっていた。話の流れや全体の構成が巧みで、まるで一本の映画を見ているようだった。震災の被害にあって、いろいろな思いを引きずりながら、集まって前向きに生きている人たちが登場したので、その姿に心打たれた人は多かったのではないか。震災から８年半経ったが、新しいコミュニ

ティを作り上げなくてはいけないという、別の難しい問題に直面している被災地の現状も取り上げて、落ちついた印象のドキュメンタリーになっていた。佐々木蔵之介さんのナレーションも非常によかった。内容のある番組だったので、放送時間が日曜日の朝早い時間帯というのはもったいない気がした。

○　１１月１０日(日)の「目撃！にっぽん」は、野蒜地区に残る人、去る人、戻る人の人間模様を居酒屋の女性店主を中心に描いた番組だった。タイトルを見ただけで、居酒屋が新しいコミュニティの核になっていくことが分かったが、その期待に沿った展開で、安心して見られてよかった。

○　１１月１１日(月)の逆転人生「逆転裁判！警察のウソを暴け」を見た。駐車違反をしたとして、取締中の警察官と言い争いになった男性が、警官に暴行したとうそをつかれ、公務執行妨害で逮捕されてしまった。９年かかりようやく国家賠償訴訟で勝訴し、無実を証明するが、このようなことが本当に現実としてあるのかと驚かされ、えん罪事件の恐ろしさを感じた。内容も濃く、国家賠償訴訟の実態もよく分析された非常にいい番組だった。

○　１１月１１日(月)の「逆転人生」を見た。警察がうそをついたことで、一人の人生をゆがめてしまった結果をもっと厳しく捉えなくてはならないと思った。今回はドラマ仕立てで多少、興味をひく作りにした部分があったのかもしれないが、誇張した表現だとは思わなかった。また違う形で番組として取り上げてほしい。国家賠償訴訟に関しては、結審が出るまでどのくらいの期間がかかるのか、年間で何件あるのかなど、もう少しデータも紹介すれば番組に厚みが出たのではないか。

○　１１月１６日(土)のブラタモリ「秋田・男鹿～海を渡った！？秋田の魅力とは！？～」を見た。さまざまななまはげが登場するなど楽しい演出で、タモリさん本人が楽しんでいる様子が伝わってきた。八郎潟干拓の歴史が紹介されるなど、見応えがあった。秋田美人の謎について、ロシア人との縁が深いという説には大変共感した。

○　１１月１８日(金)のあさイチ「兄弟姉妹がひきこもり　あなたならどうする？」を見た。たくさんの視聴者が見られる時間帯に取り上げたことに大きな意味があると思う。インターネットですぐに生の視聴者の声が反映される演出や、「助けて」という悲鳴が聞こえるような番組の構成になっていた点もとてもよかったと思う。

○　１１月３日（日）の日曜美術館「天平の風　令和に吹きぬ　～第７１回　正倉院展～」を見た。宝物を保管している古櫃(こき)という箱が興味深かった。４本の脚が箱

を浮かせる役目となり、床からの湿気を防ぎ、虫やカビの被害を最小限に抑えてきたという点が印象に残った。1,300 年もの間、数々の宝物が受け継がれてきたことを目の当たりにし、日本人の心や歴史にもっと誇りを持たなければいけないと感じた。

○　１１月１０日（日）の日曜美術館「幻の国宝　佐竹本三十六歌仙絵」を見たが、１０月２３日の「歴史秘話ヒストリア」と同じような映像が使われており、新しい発見がなく残念だった。取材の制約があったのかもしれないが、もっと多くの歌仙絵を見たかった。

○　１１月１６日(土)の「アニメ　魔入りました！入間くん」を見た。入間くんが、人間の字が読めるというだけで「すごい！」と言われる場面に、はっとさせられた。その人のよさや特技は、目立つところに目が行きがちだが、当たり前にできることも一つの能力だという目線を忘れてはいけないと思わせてくれる内容だった。小学生にとても人気があるので、これからも注目している。

○　１０月１９日(土)の国宝へようこそ第２集「洛中洛外図屏風」（ＢＳ４Ｋ 後 8:15～9:00)を見た。絵が鮮明で、肉眼で見てもわからないものが、最新のカメラだとこれほどまできれいに映るのかと驚いた。祇園祭の絵にスポットライトを当てて読み解く部分が新鮮だった。狩野永徳が祇園祭をなぜ克明に繊細に描いたのかという点について、応仁の乱で荒廃した京都が復興していく様子を重ね合わせたという説明があり、復興というキーワードがこの絵にもあることに感動した。音楽がナレーションと重なり、聞き取りづらい部分があったのが残念だった。

○　ＢＳ４Ｋ「４Ｋでよみがえるあの番組」で、「新日本風土記」など、過去の番組をデジタル加工してきれいな映像で放送しているが、この取り組みはとてもいいと思っている。今では見ることのできない貴重な映像も多く、地域の良さを伝える一つの手段になると思う。　アーカイブを放送するだけではなく、蓄積して一般の人にどのように見せていくのか、地域おこしをしている人たちがどう活用できるのかという視点でもぜひ取り組みを続けてほしい。

ＮＨＫ仙台拠点放送局
番組審議会事務局

２０１９年１０月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１７日(木)、ＮＨＫ仙台拠点放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、東北ココから　特集　震災８年半「福島　子どもたちの心と体は今」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　　藤村　ゆき（(株)健康米味楽農場　代表取締役）
副委員長　　坂田　裕一（ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター 理事長）
委　　員　　相原　和裕（河北新報社　論説委員会委員長）
桂木　宣均（日本地下水開発（株）代表取締役社長）
佐藤勘三郎（株式会社ホテル佐勘　代表取締役社長）
佐藤　美嶺（防災士）
鷹山ひばり（七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長）
南條　和恵（仙台大学柔道部女子監督）
八代　浩久（東北電力株式会社　取締役　常務執行役員）

（主な発言）

＜東北ココから特集　震災８年半　「福島　子どもたちの心と体は今」
（総合 ９月１３日(金)放送）について＞

○　東日本大震災がどのような形で生活環境に影響を与えて子どもの肥満につながっているのか、とてもわかりやすく説明されていた。幼少期の生活習慣が子どもの将来を大きく左右することもよくわかった。ただ、番組が保護者を責めているような印象を受けた。保護者だけではどうにもならないこともあり、専門家の助けが必要だということにもスポットを当ててほしかった。

不登校については、具体的な事例が取り上げられていて、子どもの心の痛みが伝わってきた。子どものＳＯＳを受け止める大人の意識が大切だと紹介されたが、福島だけではなく他の地域でも言えることだと思う。

解決がなかなか難しい課題だからこそ、多くの人に正確に知ってもらう必要があ

ると思う。ぜひ継続的にこのテーマを取り上げてほしい。

○　教育現場の様子を具体的に紹介しながら、小児科医や臨床心理士の意見が紹介され、解決策も含めて分かりやすく丁寧に取材されていたと思う。東日本大震災の影響が子どもたちの心身の健康を長い時間をかけてむしばんでいる現状が伝わり憤りを感じた人も多いのではないか。

スタジオゲストの福島大学の生島浩教授が「総合的に支援するシステムが必要だ」と言っていたが、具体的にどうすればいいのかまで踏み込んでほしかった。

福島大学の佐藤則行特任助教による「こころの授業」が非常に印象深かった。佐藤さんが「ストレスをどう解放するか。ＳＯＳをどう出すか。上手に助けてほしいと伝えられることも大事な能力」ということばが記憶に残った。もう少し時間をとってこの授業を取り上げてもよかったのではないか。子どもたち自身にもこの番組を見てもらえば、いろいろ学べるのではないかと感じた。

○　子どもの肥満は、生活習慣に大きな影響を受けていて、子どもの責任ではないという話や「頑張った子どもたちの電池が切れてしまった」ということばが印象に残った。

現在、学校では体を動かす時間が減っていると聞く。体育の時間のあり方を見直すことや、地域の中でも健康意識を高めるためにスポーツを取り入れていくことも必要なのではないかと感じた。

不登校は、いじめや家庭環境などさまざまな影響で起こる問題だと思う。どうすれば解決できるのか、番組で取り上げることで問題提起にはなっているが、答えまでたどり着かないことが多い。もっと時間をかけて取り上げていってほしいと思う。

○　子どもの肥満の問題は大人の問題でもあると思う。福島県は特定健診でメタボリック症候群に該当した県民の割合が高いと聞く。大人の食生活の乱れは子どもに直接影響すると思う。子どもの問題と限定せず、さまざまな要因による大人の問題でもあることを伝えたほうがよかったのではないか。また、東京電力福島第一原子力発電所の事故による被害が大きかった地域と、少なかった地域では、子どもたちへの影響は違ったのではないかと思う。単に福島という地域でくくるのではなく、地域ごとに比較してもよかったと思う。

不登校の統計について、全体としてはよくわかったが、東日本大震災の時に未就学児、小学生、中学生だったなど年代別に、それぞれどう推移していったのか分け

てもよかったのではないか。また、小学校低学年と高学年など年代をもっと細かに区切った数字にしてほしかった。

不登校における学校の取り組みを紹介していたが、家庭での取り組みはどうだったのかという点にも、踏み込んでほしかった。福島県がインターネット上に相談窓口を開設したことを紹介し、解決の手段を提示したことはよかったと思う。

○　限られた時間の中で、とてもまとまった良い内容だった。身体的な面と精神的な面の両方からアプローチをしていて、さまざまな課題について総合的に把握できる内容になっていたと思う。学校関係者、行政、有識者などがそれぞれの立場で苦労しながら問題解決に取り組んでいる状況がよく伝わってきた。効果が出ている取り組みがある一方で、新たな課題、複雑な課題も顕在化している状況も分かった。今回特に不登校になった子どもたちへの対応の仕方がとても難しいことを改めて感じた。番組では心の中の原風景を思い出すことで心を開き、元気を取り戻すという方法が紹介されていてよかった。全ての子どもにあう対策はなかなかないと思うが、個々人に寄り添いながら、心を開いていく取り組みが重要になってくると思った。

○　東日本大震災から８年半が経過し、さまざまな関連番組を見たが、問題提起をする番組が多いように感じた。そろそろ解決策を伝えることに軸足を移していってもいいのではないか。今回の番組も解決策について伝える時間をもっと取った方がよかったと思う。

さまざまな統計データがあったが、不登校の児童の数が 2015 年から横ばいになっていることについて「現場の必死の努力によって増加に歯止めがかかった」という説明だけで終わっていた。それはどうしてなのかという点が大事だと思うので、もっと踏み込んでほしかった。

生島教授が子どもと家庭を総合的に支援する社会の仕組みが日本に必要だと話していたが、それがどのようなものかという説明がなかったのが残念だった。

心の授業で、ストレスを抱え込まないスキルや上手にＳＯＳを伝えられる能力が大事だと紹介していたが、企業でも応用できると感じた。

東日本大震災や東京電力福島第１原子力発電所の事故について、現状の問題を把握して提起することも大切だが、次の一手、将来について提言する番組をもっとつくってほしい。

○　肥満や不登校の問題が顕著化している福島県の子どもに対する問題や課題がよく

わかる内容だった。運動不足が深刻化していた子どもたちに対するアプローチとして、先生たちが少しの移動時間でも子どもがつい体を動かしたくなるような工夫をしていたことや、小児科医が出張授業で子ども自身に健康の大切さについて伝えていたことは大変よい取り組みだと思った。

また、不登校の問題に関しては、周りの大人ができることとして、体調の変化を見逃さないことや話を聞いてあげることが挙げられていた。一見、元気に見える子どもこそ内に秘めていることがあるかもしれないので危ないという話があったがそのとおりだと思った。これは福島だけではなく、他の地域にも通じる部分もあるので、見た人の参考になったと思う。被災地の現状を少しでも多くの人に知ってもらうという意味では、たくさんの人に視聴してもらいたい番組だと感じた。今後も継続して取り組んでほしい課題だと思った。

○　全体の番組構成が分かりやすく、とても見やすい番組だった。だた、東日本大震災後の課題として、肥満と不登校という２つを取り上げたことについては、福島だけの課題ではないと感じた。人口減少などで学校が統合される地域でも同様の問題はあると思う。また、不登校の問題については、学校教育の場だけで解決できることではないと思う。今回は学校に寄り過ぎていたように感じた。もっと地域や家庭、子ども同士という視点があってもいいと感じた。

最後にスタジオゲストの小児科医の菊池信太郎さんが、福島で行われているさまざまな事例を全国の子どもたちに還元できるように発信していきたいと言っていた。全国で取り組めるような具体的な内容も提示してほしかった。

○　東日本大震災の爪痕が、今も子どもたちの心や体に影響を与えていることを改めて感じた。分かりやすい内容だったが、登場人物や事例が多くて、どこに焦点を合わせて見ればいいのか、つかみにくい印象だった。前半は、肥満と不登校の二つの問題を扱っていたが、それぞれの問題点の掘り下げ方がもの足りなかった。後半は、解決策を取り上げていたが、ストレスに向き合う「こころの授業」は、ぜひ全国でも取り上げてほしいと思った。自分だけで解決しないで、「助けて」と上手に伝えることは、子どもだけでなく大人にもぜひ伝えてほしいと思った。もっと深くまで掘り下げてほしい話題だったが、駆け足で番組が進んでしまったのが残念だった。

スタジオで、子どもたちが困ったときに相談できる場所をボードを使って紹介していて、とてもよかった。ただ、子どもたちがこの番組をどれだけ見ているのか疑問に思った。スタジオのセットは木のぬくもりが温かく感じられ、難しい問題を扱

う番組だったが落ち着いて見ることができた。

○　福島県の子どもの肥満と不登校の問題を取り上げた番組だった。小児科医や臨床心理士など福島在住の信頼できる専門家に意見を求めていてとてもよかった。さらに、福島には虫歯がある子どもが多いという課題もある。学校で歯科検診をいくら行っても、歯科治療に行かせないということは、家庭環境に何か問題が起きているのだと思う。今回は、子どもへの取材に特化していたが、子どもの課題は、必ず家庭や地域の課題につながっている。子どもが困っている家庭には困難を抱えている家族の存在があることが多いというところまで掘り下げて報道してほしいと思った。

（ＮＨＫ側）

地域や家庭の問題まで踏み込んで考えていくことが必要だという意見が多く頂いた。今後の参考にしたいと思う。

＜放送番組一般について＞

○　１０月４日(金)の東北ココから　特集　震災８年半「この街で命は守れるか　～津波防災はいま～」を見た。どこをポイントにしているのか分かりにくい番組だった。最大規模の津波が発生したときの浸水想定を地震データがそろわないことや暫定公表はかえって混乱を招くとして、岩手や宮城では出されておらず、各市町村でハザードマップを作ることができないという現実をこの番組で初めて知った。台風などで想定外の被害が出る中、岩手や宮城のように、想定を出さないという選択肢もあり得るのかと感じた。ただ、岩手や宮城で浸水想定を公表しない理由について、アナウンサーが説明しただけだったが、県の防災の責任者の生の声を取り入れるなど、もっと踏み込んでほしい部分であった。

カメラワークに落ち着きがなかったことが気になった。意図をあまり感じない動きやブレがあり、目が疲れた。大きなテレビで見ている家庭が増えているので、ブレがよりはっきり見えてしまうので、気をつけていただきたい。

○　９月２９日(日)のＮＨＫスペシャル「ＡＩでよみがえる美空ひばり」は、美空ひ

ばりさんの声をＡＩで再現して新曲を歌うという番組だった。最後に披露された新曲「あれから」という曲は、美空さんの声そのもので感動した。

声の再現には、１年ほどかかったということで、ファンを感動させるような声の再現にはとてつもなく人の手がかかるという事実をおもしろく感じた。

一方、美空さんの画像は、動きがぎこちなく、表情も硬くて似ていないと感じた。画像はＡＩというまだ未熟な技術の限界を露呈していたように感じた。

人の声が容易に再現できるようになると、今後病気で声帯を失った人など、医学的に有効な使い方ができるのではないかと思った。一方で、亡くなった人の声の再現となると、倫理的な問題も出てくると思う。今回は美空さんをよく知る人たちの思いが結集して見事に再現できたという、特別なケースだったと思う。

○　１０月６日(日)のＮＨＫスペシャル「大廃業時代～会社を看取（みと）るおくりびと～」を見た。事業承継は、経済界の中で大きなテーマだ。冨山和彦さんが出演していたが、単に経営コンサルタントとしての紹介だけではなく、これまでの略歴をもう少し詳しく紹介した方がより内容が分かりやすかったのではないか。最後に「中小企業が強くなければ国民は幸せにならない」という内容でまとめられたのがよかった。

○　１０月１３日(日)のＮＨＫスペシャル「東京ブラックホールⅡ　破壊と創造の１９６４年」を見た。トイレはくみ取り式が当たり前で、集めたし尿を東京湾の沖合に捨てていた現状、血を売ってお金を稼ぐ売血が横行していたなど、衝撃を受けた。当時を再現する映像なので、全体的にモノクロの映像だが、売血の血の部分だけが赤に色づけされていたり、空気の汚染のため子どもたちがつけていたマスクだけが黄色く色づけされていたり印象的な映像が多かった。当時の映像に現代の人間をはめ込む技術に驚かされた。この番組を通して、1964 年の東京オリンピック、そして来年に控えた東京オリンピックでもお金の使いどころが違うのではないかと考えさせられた。

○　９月２６日(木)のクローズアップ現代＋「１６歳の少女が世界に訴える　温暖化非常事態」を見た。９月２３日にニューヨークで開かれた国連の温暖化対策サミットでスピーチしたスウェーデンのグレタ・トゥーンベリさんにスポットを当てていたが、スピーチ直後の放送で、短期間で番組にまとめるＮＨＫの機動力に感心した。北極の氷山が音を立てて崩れる様子や氷河がなくなってきている様子など衝撃的な

場面を鮮明な映像と解説を交えて紹介をしていてよかった。国立環境研究所地球環境研究センターの江守正多副センター長がゲストとして出演していたが、コメントが示唆に富んでいて、重大な警鐘を鳴らしてくれたと思う。東北からも再生可能エネルギーや地球温暖化、気候変動への研究について提言をするような番組を作ってほしいと思う。

○　１０月１日(火)のクローズアップ現代＋「大規模停電のリスクにどう備えるか～検証・台風１５号～」は、台風１５号による停電の長期化や電源車の適切な配備についての問題を提示する内容だった。模型による実験などがあり、分かりやすかった。災害が起きて世間の関心が高いうちに、なぜ被害が大きくなったのか、どうすれば解決できるのか、ヒントはどこにあるのかを検証していてとてもよかった。

　きちんと対策をとっている自治体を紹介していたので、まだ対策ができていない地域の参考になったと思う。いい意味で自治体へのプレッシャーにもなったのではないか。対策を講じる上で住民の理解が必要だが、その理解を促進するという意味でも、テレビで取り上げた意義は大きい。自治体、電力会社などが今後どうしていけばいいか、解決のヒントを住民と一緒に考えるきっかけになるような番組をこれからも期待したい。

○　１０月２日(水)のクローズアップ現代＋「追跡！ネット通販　やらせレビュー」を見た。やらせレビューが組織的に大がかりに行われている現実に驚いた。中国にまで取材を広げて、その実態を明らかにしていたが、調査報道のお手本のような成果を上げた番組だと思う。

　中国の家電メーカーの女性社員が「日本人はレビューがないと、まずその商品を買わない。食事でも宝くじでも行列が長いほどそこに行きたがる。自分で判断する意識が低い」と言っていた。標的になっているのは脇の甘い日本人全体だという不愉快な事実がくっきり浮き彫りになっていた。インターネットでの通信販売が全盛の今、消費者の注意力がこれまで以上に試されると思った。利用者がいかに自衛できるかにかかってくる問題だと思う。

○　９月２０日(金)のドキュメント７２時間「訪問看護師　街をゆく」を見た。家庭の状況に寄り添って、家族の暮らしを考えようとする雰囲気があって、訪問看護師のすばらしさを感じた。高齢化が進む中で、自宅への訪問看護が一般的になってきている実態が非常によく分かった。都市部はいいが、交通が不便な山間部ではどの

ように訪問看護を行っているのか、あるいはできていないのか、一体どうなっているのだろうと思った。また、病院で看護師が不足していると聞くが、このような状況の中で、訪問看護師が増えているという。このギャップは何だろうと感じた。

○　９月３０日(月)の逆転人生「消せるボールペン　逆転大ヒット！」を見た。苦節３４年の研究と努力の成果でつかんだ大ヒット商品を生み出した中筋憲一さんという人物は魅力的で、勇気づけられた人が多いのではないか。消せるインクはすでに開発されていたが、商品化するためにはさまざまな問題や思わず笑ってしまうようなエピソードもあり楽しく見ることができた。中でも、消せるインクの第二開発部のエースが、エリートが集まる第一開発部に引き抜かれた話は、ドラマ以上にシリアスで、つい引き込まれてしまった。自分の人生のチャレンジと重ねて考えることができる非常にいい番組だった。

○　１０月８日(火) プロフェッショナル　仕事の流儀「伝説の家政婦、再び～タサン志麻の新たな挑戦～」を見た。自分のつくりたいものではなく、依頼した人の家の冷蔵庫の食材と調味料を見て、その家の味つけを想像して即興で料理を作り上げてしまう姿に驚いた。志麻さんの生き方は、子育て中の女性を応援し寄り添うようで好感が持てた。料理人でありながら、女性として、母として、悩みながらも向上心のあるすばらしい生き方を見せてもらった気がする。今後も取材を続けてほしい。ただ、過去と現在を行ったり来たりする作りになっていたが、過去なのか現在なのかがはっきりわからない部分も多かったのが残念だった。

○　９月２８日(土)の福島をずっと見ているＴＶ　ｖｏｌ．７８「東北と世界をつなぐ～２０２０その先へ～」(Ｅテレ 後3:00～3:44)を見た。番組ＭＣの箭内道彦さんが、オリンピックを東北の復興につなげようと立ち上げたプロジェクトについて紹介していた。体長１０メートルの巨大操り人形「モッコ」を作成して、東北の被災地を練り歩くという夢のあるプロジェクトだった。そのモッコのデザインは、福島、宮城、岩手の子どもたちが、自分たちの自由な発想で描くという企画から生まれた。子どもたちにとっては、自由な心の表現をできる機会になったのではないか。被災された方の中には、子どもたちに夢を与える取り組みだから関わりたいと声をあげる人も出てきた。今後もプロジェクトの活動を追いかけて紹介してほしい。

○　９月２８日(土)ウワサの保護者会「校長先生　中学校を変える！」を見た。東京

都世田谷区の桜丘中学校の西郷孝彦校長先生を尾木直樹さんが訪ねて学校の様子を見ていくという内容だった。ピアスをしている生徒、髪を染めている生徒がいて驚いたが、いきいきと学校生活を送っている様子が画面から伝わってきた。インクルーシブ教育という障害、性差、国籍などの違いに関わらずだれもが共に学べる環境を整えた教育を基本にしているということだった。一人で勉強したい生徒、教室に入りづらい生徒が集まる場所もあり、自分のペースで勉強に取り組む環境もあり、自分の居場所を作ることができる学校だと思った。このような教育を受けた子どもたちが将来社会に出たときに、日本の社会がどう変わるのかと期待したいと思った。

○　９月１８日(水)の 英雄たちの選択「不可能への挑戦～河井継之助の北越戦争～」と１０月２日(水)の「悲運の天才・菅原道真～なぜ怨霊は神となったのか～」を見た。どちらも触れられることの少ない史実を掘り下げていて興味深い内容だった。菅原道真については歴史的な事実をうまく織り交ぜながら構成されていた反面、河井継之助は最後が中途半端になっていたと感じた。河井が会津で最期を迎えた部分にも触れたほうがよかったと思う。また、ゲストのコメントも、菅原道真のほうは的確なコメントが多かったが、河井継之助のほうはあまり的確ではなかったように感じた。全体のストーリーを理解し、そこにうまくコメントができるゲストを選んでほしい。

○　１０月４日(金)の増田明美のキキスギ？「出会いと金メダルと東京五輪　柔道家鈴木桂治さん」について、司会の増田さんの声はとても聞きやすく、インタビュアーとしても秀逸だと感じた。また、ゲストの鈴木さんは非常に論理的で巧みな話し方をしていた。増田さんの話を引き出す力のおかげではないかと思う。また、鈴木さんのライバルと言われる柔道家の井上康生さんとの秘話などが非常におもしろかった。

　番組の途中で気象情報の警報が解除になったという速報が入った。番組に聞き入っているのに急に中断されてしまい残念だった。警報の発令となれば急いで伝える必要があると思うが、解除の情報は番組の流れも考えた上で入れてもいいのではないか。

○　１０月１２日(土)からの台風１９号関連の報道について、さまざまなデータを示し、台風の状況を刻々と正確に伝えていたと思う。市町村から避難指示がでても、なかなか動けない人もいるが、データで具体的にその危険な状況を示してもらう

と、早めの避難につながると思う。また、「ＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」の中に「あなたの天気・防災」というページがあり、居住地周辺のハザードマップを見ることができた。また外国人向けに「ＮＨＫワールドを見てほしい」という英語の画面表示も出ており、日本語を含めて、１８の言語でニュースを伝えていて配慮が行き届いていたと思う。画面の左下に雨量レーダーの画像を載せていた点もよかった。避難所生活のアドバイスや注意事項も画面表示されて、非常に役に立つと思った。

○　１０月１２日(土)からの台風１９号関連の報道について、ＮＨＫは早い時間から注意の呼びかけを開始して、被害の最新情報も素早く、時間をかけて報道していたと思う。各放送局から現地の状況について随時報道していたが、放送局が多く、今どこの放送局なのか分からないことがあった。画面上に放送局名を出してもらうなどの工夫があるとよかった。

　データ放送では、川の水位の情報や避難所の場所など多くの情報を一覧で見られて便利だった。全国放送のときでも、逆Ｌ字型の画面では、地方の情報に特化してあったので見やすかった。仙台からの放送に切り替わったときに逆Ｌ字型の画面が消えてしまうことがあったが、地方から放送しているときは全国の動きを伝えるなど切り替えができたらさらに役立つのではないかと思った。

　被災後の情報提供についても手を洗うことの大切さなど避難所生活での注意点などささいなことだが重要なことを発信していた。見ている人たちがはっと気づいてすぐ行動に移せるような役立つ情報を多く出していたと思う。

○　１０月１３日(日)の台風１９号関連の報道について。青森放送局の気象予報士の解説が早口で聞き取りにくい場面があった。アナウンサー、キャスターには、ゆっくりとわかりやすくひと言ひと言を丁寧に話してほしいと思う。

　現場からの中継の場面では、「水がここまで浸かっています」「風が強いです」など、見たままをリポートするのではなく、もう少し映像では分からない情報を伝えてほしいと感じた。経験豊富なアナウンサーだと説明も上手で安堵感がある。若いアナウンサーやキャスターもふだんからことばづかいを意識し訓練を重ねることで、突発的なニュースでも相手によく伝わる落ち着いた話し方ができるのではないかと思う。

　また、各地域の情報を重点的に放送する時間が少なかった。地元の情報を知りたいと思う視聴者は多いので、東北地方としてくくるのではなく、各県ごとの情報ももっと発信してほしかった。時間帯が変わっても同じ情報が出てくることもあっ

た。マンパワー等の制限があるのかもしれないが、新しい情報を発信し続けてほしい。

○　１０月１３日(日)の台風１９号関連の報道について、山形局の画面の逆Ｌ字型の情報が１３日の朝からなくなった。まだ山形新幹線が動かず、浸水をした地域もあったのでなぜだろうと思った。できればもう少し長く情報発信を続けてほしかった。

○　かんぽ生命の保険の不適切な販売をめぐる問題を取り上げた「クローズアップ現代＋」の取材や放送が、郵政側の不当な圧力によってゆがめられたという報道があった。報道の現場は萎縮しないで、この問題に切り込んでほしいと思う。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０１９年９月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１９日(木)、ＮＨＫ仙台放送局第１会議室において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、２０１９年度後半期の国内放送番組と東北地方向け放送番組の編成について説明をし、２０２０年度の番組改定とあわせて意見交換を行った。

その後、９月６日(金) 東北ココから　特集　震災８年半「初めて語る“あの日”～大槌町職員と遺族の８年半～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、１０月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	藤村　ゆき	((株)健康米味楽農場　代表取締役)
副委員長	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター 理事長)
委　　員	相原　和裕	(河北新報社　論説委員会委員長)
	桂木　宣均	(日本地下水開発（株）　代表取締役社長)
	佐藤　勘三郎	(株式会社ホテル佐勘)
	佐藤　美嶺	(防災士)
	鷹山　ひばり	(七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長)
	西内　みなみ	(桜の聖母短期大学　学長)
	八代　浩久	(東北電力株式会社　取締役　常務執行役員)
	山田　理恵	(東北電子産業（株）　代表取締役社長)

(主な発言)

＜「２０１９年度後半期の国内放送番組の編成」および
「２０２０年度の番組改定」について＞

○　一部の４Ｋテレビでは、ＢＳ４Ｋ放送の映像が暗く見えるという新聞報道があった。放送局側が主体性を持って、ＢＳ４Ｋを普及するためのＰＲをもっとしてもいいのではないか。

○　ＢＳ４Ｋの注目番組を知りたい。新しく４Ｋテレビを購入した人が何を見たらいいか困らないように、おすすめの番組についてもっと積極的に紹介してほしい。

（ＮＨＫ側）

ＢＳ４Ｋは、曜日ごとにジャンルを分けた編成をしている。月曜日は音楽や伝統芸能、スポーツ、火曜日は自然・科学・宇宙など、水曜日はドラマや映画、木曜日は文化・教養・教育、金曜日は紀行・地域・暮らしなど、曜日によってジャンル別で放送しているので、興味に合わせて見てもらえるようになっている。例えば、デジタルリマスターされた「大草原の小さな家」や「刑事コロンボ」などは、驚くほどきれいな画質で見ることができるので、ぜひ見ていただきたい。

＜東北ココから特集　震災８年半
「初めて語る“あの日”～大槌町職員と遺族の８年半～」
（総合　９月６日(金)放送）について＞

○　震災記録誌「生きる証」を作ったことで、被災者の方々が８年間、話せなかった思いをことばとして紡ぐことができたのだと思う。思いを紡ぐことの大切さ、難しさが伝わり、非常に感動した。東日本大震災から８年経ったからこそ話せる思いもあることも分かった。震災で家族を亡くした方の思いが、番組を通して伝わってきた。

ただ、大槌町で震災記録誌を出すまでになぜ８年かかったのかというところについて、もう少し踏み込んでほしかった。批判するわけではなく、次はどうするべきかという視点で内容を深めていってほしい。

○　登場する人たちの心情に寄り添うような撮影の仕方に共感が持てた。役場で仕事をしている男性を少し離れたところから撮ったり、息子を亡くした高齢の女性が台所に立つ後ろ姿をのれん越しに撮ったり、一つ一つのシーンで番組に出てくる人の心情を巧みに映像で表現していたと思う。撮影に制約がある中で、印象的な映像表現を見せてもらった。落ち着いた女性のナレーションも番組の内容に合っていた。

震災記録誌を編集する場面で、大槌町職員の「生還」が生々しいということで削除するシーンが印象に残った。津波の犠牲にならなかったのは偶然でしかないが、助かったことでその後も苦しみ、悩むという心情が描かれていた。特に役場職員という立場もありなかなか言いたいことも十分には言えない、そういうもんもんとした苦しみを視聴者の共感を呼ぶ形で番組にできていたと思った。

○　番組の中に出てくることばの一つ一つに重みがあった。大槌町役場職員だった息子を津波で亡くした三浦チエ子さんの「今さら聞きたくない。聞くのであれば津波の後すぐに聞きたかった。せっかく落ち着いてきたのに、今しゃべられたらまた新しくなる」ということばは、多くの遺族の思いなのだと感じた。８年以上経って当時のことを詳しく知るのは、相当な覚悟が必要で、遺族の戸惑いや不安が伝わってきた。また、当時三浦さんの息子と同じ課にいた久保晴紀さんの「自分の中でなんで生き残ったのは俺なのよ。どの面下げてご遺族のところに行けばいいのという葛藤があった」ということばから苦悩が伝わってきた。この二人を両面から取り上げたことで、役場職員と遺族のどちらかに思いが偏ることなく、それぞれがどういう思いを抱いてこの記録誌に向き合っているのかが分かった。

最後に「あの日と向き合い、新たな一歩を踏み出した町です」という語りで締めくくっていたが、番組制作側のこうなってほしいというメッセージではなく、淡々と事実を伝えて見守っているという雰囲気が伝わってきてとてもよかった。

○　番組を見ていて、戦争の証言と同じような気がした。人が悲惨な経験をしたときに何を考え、何を問うのかということを考えさせられた。震災記録誌を作ることで、ことばにできなかった思いをことばで結実させていた。その過程を丁寧に映像で表現していたと思う。考えている思いをことばにすることで、次に進んでいけるのではないかと感じた。今回の内容は、時間が短く消化不良な部分もあった。非常にしっかりした番組なので、これをもとにもっと内容を膨らませて、次に何か災害があった時の参考になるような番組に成長させてほしい。

○　８年という時が大槌町の方たちに自分の思いをことばにする力を与え、そこにＮＨＫが寄り添って、番組という形で事実を淡々と映像化されていてとてもよかった。

映像の撮り方もよかった。津波で役場職員だった息子を亡くした三浦さんが、息子の同僚だった久保さんの話しを聞いた後、玄関で見送る場面、「またいつでもおいで」と語りかける様子をその背後から撮っていて、非常に共感できた。大変な状況の中でも、人が人を大切に思う気持ちや、ことばだけで責め合ったり傷つけ合ったりするのではなく、実際に顔と顔を突き合わせてお互いに大切な命だったということを確認し合うことが、時を経ても必要なのだと改めて気づかせてもらった。

目に見える建物などの復興はたくさん報道されるが、今回の番組のように心の深い傷や思いを丁寧に描く番組はとても温かくて励まされるので今後も期待している。

○　８年半たっても生き残った職員や遺族には、重い事実と向き合うことの難しさ、変わることのない心情が残っていた。そこを番組では予定調和ではなく客観的な事実を追い求めて視聴者に訴えかける姿勢で構成していて共感をもった。

当時職員だった息子を亡くした遺族と生き残った職員は、犯罪の被害者と加害者ではないのに、しっかり向き合うことに難しさがあり、お互い避けてきたという事実。こういった心情があることは忘れてはいけない。今回の番組のようにしっかり残していくべきだと感じた。８年経って遺族と生き残った職員がようやく直接会えたことで、心の中に変化が生じたのではないか、悲惨な災害を乗り越える明日への希望につながってほしいと思った。

○　東日本大震災から８年経った今でないと語れない話がたくさんあることを改めて感じた。さまざまなぶつかり合いや葛藤があったのではないかということを思わせるような番組だった。

役場職員だった息子を亡くした三浦さんの「今さら聞きたくない」ということばがとても印象的だった。

災害はなくならないので、その時にどう対応するかが非常に大切だ。当時の写真をベースに、その時の対応がベストだったのかを考えるときに、回答のない問いかけがたくさんあって、非常に難しい問題だと痛感した。

また、亡くなった町長の話があってもよかったと思う。当時総務課の広報担当者が撮影した写真については、もう少し紹介してほしかった。

○　職員だった息子を亡くした女性に対して生き残った職員が、「もっと早く来たかったけれども、申しわけない」と言わなければならないというのはとてもつらい。生き残った職員は悪くないのに、生き残ったため遺族に会いに行けないという思いを持ってしまう。そのような思いを抱えた人はほかにもたくさんいると思う。そういう方々をサポートする方法はないのかと思った。

震災や津波の状況を口にするということは、多くの方が亡くなったからこそ抵抗があって、なかなかことばに出せない。しかし、東北以外の地域の人や海外の人などに伝えていく必要があると思う。映像などで記録として残すことは非常に重要だと感じている。記憶がだんだん薄れていく中で、あのとき何があったのかを、亡くなった方のためにも証言として残すべきだと思う。ぜひこのような番組をもっと東

北以外の地域の方も見られるようにしてほしい。

○　生き残った人と亡くなった人が同じ場所にいながら生死を分けたという重い事実をどう伝えていくべきなのか。それは、報道の役割なのか、学術的な記録なのか、文学、映画、演劇など別の形に変えて伝えていくべきものなのかということをこの番組を見ながら考えさせられた。
震災を検証する番組は、これまで学識経験者が出てコメントすることが多かったが、今回はそれがなく、現場の生の声を大切にした番組でよかった。時間をもう少し長くとってもよかったのではないか。この番組をつくったのでこの問題はこれで終わりとせず、これが始まりだと考えて取材を続けていってほしい。
　震災後、生き残った職員の中には心に傷を負って休職する人もいた。大槌町以外の被災地でも多いと聞く。そういった人たちの心が癒やされ、次に向かって生きるためには何が必要なのかを考えて行かなければいけないと感じた。また、現在の平野公三町長のコメントも聞きたかった。

○　生き残ったことを喜べない、語ることができない人たちの心の苦しみが伝わる番組だった。生き残った人が生きていることを悔やむような発言、今も苦しんでいることをぽつりぽつりと話す表情がとても印象に残った。生き残った人たちがこれから前向きに生きるためにも、この震災記録誌というのは意味のあるものだと感じた。
　職員だった息子を亡くした三浦さんの「今さら聞きたくない。今聞いたらせっかく落ち着いたのにまた新しくなる」という本音が胸に刺さった。三浦さんの家を息子の職場の後輩だった久保さんが訪ねて話すことで分かち合い、かたくなだった心が変わっていく２人の表情に涙が出た。亡くなった人を忘れないでいてくれるということは、遺族にとって救いや癒やしになると思った。
　番組を通して、本当に伝えたかったことが何なのか、最後まですっきりしなかった。一筋の光が見える番組であってほしかった。

（ＮＨＫ側）
　大槌町が震災記録誌をまとめることをきっかけに取材を始めた。番組では、震災記録誌がなぜ今でるのか、８年の重さを伝えたかった。役場職員同士でも当時何があったのかを話せなかったという事実もあり非常に重いことだった。３月に旧庁舎が取り壊されたことで、当時何があったのかを話す気

になったところはあったようだ。旧庁舎を残すか残さないかという議論ではなく、次のステージに入ったことが伝わるように制作したつもりだ。今回の番組をスタートと考えて、今後も取材を続けていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　７月２０日(土)のＥＴＶ特集「親亡きあと　我が子は…～知的・精神障害者　家族の願い～」は、自分の人生と重ねながら見ることができる番組だった。

知的障害のある子どもの高齢の母親が、何とかしたいが何ともできないということばに胸を打たれた。「私たちがいなくなったらこの子はどうなるのか」ということばに、親亡き後、我が子はどうやって生きていくのかという切実な問題が垣間見えた。福祉とは何だろうかと考えさせられた。私たちが満足して安定した生活ができることのありがたさを思い知らされた番組だった。

○　８月８日(土)の特集ドラマ　マンゴーの樹の下で「～ルソン島、戦火の約束～」(総合後 10:00～11:13)は非常にしっかりとした内容でとてもよかった。ヒロインを演じた清原果那さんの演技は、存在感があってとてもよかった。８月４日(日)にＢＳ１スペシャル「マンゴーの樹の下で～こうして私は地獄を生きた～」というその当時生きてきた人の体験談をまとめた関連番組も放送されていてよかった。

○　８月１２日(月)のＮＨＫスペシャル「かくて“自由”は死せり～ある新聞と戦争への道～」(総合 後 10:00～10:49)は論点もはっきりしていてよい番組だった。番組を見て自由主義思想だったものが政治情勢や経済情勢によって一気に揺り動かされて、人々の意識が日本新聞の思想にすがりつくことになり、そして国民全体を戦争に誘導していく大きな力になったのではないかと感じた。

登場人物にふんした俳優が、当時の原稿や発言を朗読する場面では、当時の話し方の特徴を捉えて紹介していたので、時代感覚がしっかりと伝わっていたと思う。

発行部数１万 6,000 部にすぎない日本新聞が１０年以上活動できたのはなぜだろうと思った。特定のスポンサーがいたのかという点も知りたかった。また、当初は批判していた言論界や学界が開戦間近になると翻って戦争を助長するような方向に変わっていったいきさつも掘り下げてほしかった。

○　８月１３日(火)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「朝ドラ“おしん”誕生～人生をかけた、女たち～」を見た。おしんがいかだに乗って酒田に奉公に出されるシーンの撮影には実は多くのドラマが隠されていた。当時、いかだを使うことはなく、何とか実現させるために地元の方々の協力を得てようやく撮影できたということでさまざまな人の思いが一つのシーンに集約されていたと分かり感動した。また、おしんの少女時代を演じた小林綾子さんやおしんの母親役の泉ピン子さん、２人のインタビューが印象的で、いかにこのドラマにかけていたか、役者魂を見せてもらった。全体を通して感じたのは、日本の女性の強さ。平凡な人生をドラマにしたときに、女性だからこそこのようなドラマに仕上がったのだと痛感した。

○　８月１６日(金)の「スーパープレミアム生中継！京都五山送り火」(BSﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後6:59～8:59)を見た。お盆は、日本的な叙情をたたえた伝統行事だと思う。京都の五山の送り火は、京都の行事だが、この中継は全国のお盆の行事の締めくくりになるような番組になっていると思う。大みそかの「ゆく年くる年」とは違い、毎年同じ場所の同じ行事を放送しているが、見ていて不思議に飽きない。穏やかで静かな時間を与えてもらっていると思う。

出演者の話が分かりにくいと感じるところもあったのが残念だった。番組の演出にあった出演者を選んでほしいと思った。

○　８月１７日(土)のＮＨＫスペシャル「昭和天皇は何を語ったのか～初公開・秘録“拝謁（はいえつ）記”～」（総合 後 9:00～9:59）を見た。モノクロの実写フィルムとドラマが交互に展開していく構成で、昭和天皇の戦争に対する思い、自分の退位をめぐる苦悩が非常にわかりやすく描かれていた。昭和天皇の率直な思いがこれほど克明に記録に残されていることに驚いた。また、再現ドラマの部分で、昭和天皇役の俳優の表情や口調が真に迫っていた。終戦後の混乱期を追体験しているような感じがした。

宮内庁の初代長官の田島道治の残した「拝謁記」が、今回初めて公開されたと番組内で紹介があったが、「拝謁記」を過去に取り上げた本もあったという報道を見たので、疑問に思った。

○　８月２６日(月)～３１日（土）に再放送された、おかあさんといっしょ「６０年スペシャル」(Eﾃﾚ 前8:00～8:24)を見た。懐かしい映像や歴代のおにいさん、おねえさんがたくさん登場したので親子で楽しんで見ることができたと思う。進行キャ

ラクター「かめけん」を浜野謙太さんが演じていて親しみやすく、６０年分の映像のダイジェストをうまくつないでいたと思う。人形劇やキャラクターを振り返る特集では、味のあるキャラクターたちは時代が変わっても愛される魅力があると感じた。この番組は小さな子どもからおじいちゃん、おばあちゃんまで、世代を超えて同じ話題で盛り上がれる。こうした番組はほかにはなかなかないと思う。ぜひこれからも魅力あふれる番組づくりを続けてほしい。

○　９月１日(日)のサイエンスＺＥＲＯ「新事実続々　解明が進む“活断層地震”の謎」は、2016 年４月に発生した熊本地震の調査で明らかになったことをわかりやすく伝えた番組だった。ゲストの九州大学の清水洋教授の説明がとてもわかりやすく、難しい内容だったが、抵抗なく見ることができた。図や模型による説明が多くて、目で見てイメージできたのがよかった。地震予測の精度は上がってきているが、やはりわからないことも多く、どんなことが起きる可能性があるのかということを一人一人が理解して、正しく備えることが大事だと改めて感じた。

○　９月４日(水)の歴史秘話ヒストリア「西郷と最後まで闘った男」は、山形・庄内藩の重臣の家に生まれた酒井玄蕃に焦点を当てた番組だった。酒井玄蕃について、酒井藩が譜代大名だったことや家老の家柄だったことなど、生い立ちの説明がもう少しあると内容が深まったのではないか。

山形局のアナウンサーが山形駅前で「酒井玄蕃を知っていますか」と街頭インタビューをしていたが、知名度が高い人ではないので知っているわけがなく、わざとらしい演出だと感じてしまった。また、博物館で、酒井玄蕃が使っていた破軍星旗を見たアナウンサーが、「これはマントですか」とコメントしていたが、知識があまりないことを見せる演出のように感じた。「ブラタモリ」のように何も知らない若いアナウンサーと知識が豊富なタモリさんの掛け合いがうまくいっている例もあるが、今回の番組でなぜそのような演出をしたのか少し違和感があった。

○　９月６日(金)のきんよる秋田「全国豊かな海づくり大会　直前ＳＰ 徹底取材！あなたの知らない秋田の海」(総合　後 7:30～8:15 秋田県域)を見た。冒頭の街頭インタビューで、「秋田の魚は？」と聞かれた人のほとんどがハタハタとしか答えられない。秋田の海ではたくさんの魚介類がとれていて、それぞれ若い漁師や料理人などが秋田の地魚をＰＲしていることがこの番組でよくわかった。さらに、秋田魁新報

社とコラボして情報を集めて番組づくりをしたということで、秋田の海に多面的に迫ることができたのではないか。豊かな海づくり大会の前日の番組として、秋田のよさ、秋田の魚のいいＰＲになった番組だった。その後に小さな旅・選「水鏡の郷潤う～秋田県　にかほ市～」が放送されていたが、鳥海山のきれいな水が秋田の豊かな海をつくっているという内容で、２つの番組を並べたこともすばらしかったと思う。

○　９月６日(金)ドキュメント７２時間「さらば東京！　移住相談センター」を見た。１日に４３人も相談に来るという実態、そこに来る人々をウオッチしインタビューすると、都会の暮らしぶりや人間模様が見えてくる。取材された方たちを通してひとり暮らしを希望する人が多いことに驚いた。しかも条件が、人が少ないところで人との関わりのある暮らしをしたいという矛盾したものだった。東京は人がたくさんいるが関わりは少ないということを痛感した。

東京から地方への移住という切り口で、都会の暮らしやそこで暮らす人々のそこはかとない寂しさが浮き彫りになっていたと思う。

時間と時を定点化して、そこに登場する人々の物語から見えてくる人々の思い、都会の暮らしぶりという世相を切り取った番組で大変興味深かった。

○　９月７日(土) ＢＳ１スペシャル「バレエの王子になる！～“世界最高峰”ロシア・バレエ学校の青春」(BS1 後 10:00～10:50、11：00～11：49) は、世界屈指の名門バレエ学校で厳しい指導に耐え成長する若者に密着していた。元トップダンサーの校長の指導はとにかく厳しいが、とても愛情にあふれていた。バレエの指導だけではなくて健康管理や振り付け、見た目などそれぞれの学生に合った指導をきめ細かに行っているのがよくわかった。バレエダンサーは美しいのは当然のことで、どれだけ努力をするか、やる気があるかをとにかく重要視していた。バレエの美しさの陰で、体力の限界に挑戦するのと同時に、トップダンサーだった校長がとにかく最後まで努力だと言い続けていたのが印象的で、非常におもしろい番組だった。

○　９月８日(日)世界はＴｏｋｙｏをめざす「妖精とゆく３度目の夏～ブルガリア新体操と山形ホストタウン」を見た。山形県村山市が東京五輪ホストタウンとしてブルガリア新体操チームを招き強化合宿を支援している。３年目になるので、選手と地元のボランティアの交流が密になっていることが画面から伝わってきた。

村山市のホストタウン事業は、政府主催の大会でも表彰されたということなので、

取材を続けてまた番組にしてほしい。

選手の１人ボリャナ・カレインさんの「強く望めばどんなハードルでも越えられる」ということばが印象的だった。

○　９月８日(日)「プレミアムドラマ　盤上の向日葵」を見た。ドラマというよりも映画のような感じもあり、映像がとてもきれいで感心した。

ただ、原作の小説では、主人公の刑事が男性で、今回のドラマでは女性だった。設定を変えたのはなぜだったのか気になった。

○　９月８日(日)「秋田大曲　全国花火競技大会２０１９」(BSﾌﾟﾚﾐｱﾑ 前1：15～4：15）を見た。大会当日の中継番組では、どれが優勝なのかが分からないが、この番組は順位が画面表示されるので非常に見やすかった。解説の日本煙火協会専務理事の河野晴行さんの話もとてもわかりやすかった。また、当日の天気が非常によかったので、迫力満点の花火がとても美しく見えた。最後に、花火師の方が対岸で松明を振り、観客もペンライトを振る場面は、本当にきれいでとても感動的だった。

○　９月１１日(水)の「てれまさむね」を見た。この週は、震災から８年半の特集をしていた。被災地で今どのようなことが起きているのか、どのような課題があるのかをきちんと伝える番組は本当に必要だと思うので、ぜひこれからも動きがあったときに私たちに伝えてくれる番組をつくってほしい。

○　９月１４日(土)のＥＴＶ特集「“中間貯蔵施設”に消えるふるさと～福島　原発の町で何が～」を見た。福島県内の除染作業で出た原発事故のごみは、東京ドーム１１杯分で、それが中間貯蔵施設に集められているが、３０年後に本当に日本のどこかに最終処分する場所が決まるのだろうかという大きな疑問を持ちながら見た。これはどうしようもない現実で、この事実を私たちは受け止めながら何とか生きていくしかないのだということを改めて痛感した。

ただ、番組は大熊町の人々、政府、その中間に立って一生懸命努力されている方たち、どこにも重点を置かずに事実を出来事として記録していく姿勢で作られていて共感できた。歴史に残る証言になると思う。しかし、こうした報道は３月１１日が近づいたときにはやらないでほしいとも思う。少しだけ忘れていた全国の人が、また福島が危険なのではないかというマイナスのイメージを強く持ってしまうので

はないかと心配だ。

○　９月１３日(金)新日本風土記「ビール」を見た。新日本風土記は、地域の伝統やお祭りなどを取り上げることが多いが、ビールという切り口で全国を俯瞰して見るというのはなかなかおもしろいと思った。ホップや麦を育てる人、野球場でビールを売っている若い女性など、さまざまな立場の人の話を交ぜながら、私たちの生活の中にビールがどう溶け込んでいるかを描いていた。ホップや麦を作る人が減っているという課題も見えた。

○　９月１４日(土)「大好き・東北　定禅寺しゃべり亭～三浦春馬さん～」を見た。観覧者の数がとても多かったのに驚いた。客層もいつもより若い方が多かったのではないか。三浦さんが観客席の中から登場する演出だったが、観客の若い女性の笑顔もよく見えたのでとてもよかったと思う。仙台の伝統工芸の焼き物などの話をしていたが、地域の活性化になるのでとてもよかったと思う。ただ、三浦さんが連続テレビ小説「あぐり」や大河ドラマ「おんな城主 直虎」に出演したときの話も聞きたかった。三浦さんのマイクが目立ち過ぎていて気になった。もう少し目立たないものにするなど工夫してほしい。

（ＮＨＫ側）

今回は、若い方にもたくさん来ていただいた。いつもはあまり見られない家族連れや夫婦なども多かったので、非常に手応えがあり、今後もいろいろなゲストをお呼びして挑戦していきたいと考えている。

○　ドラマ１０「これは経費で落ちません！」を見た。企業の経理から見える社内の人間模様や不正を暴き出していく物語で、今までにあまりない設定のドラマで非常におもしろい。主役の多部未華子さんが経理の仕事をビジネスライクに進めながら、一方、内面では恋愛のことを考えているという、表面はクール、内面はかわいいという主人公の女性をうまく演じていると思う。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０１９年７月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１８日(木)、ＮＨＫ仙台放送局第１会議室において、９人の委員が出席して開かれた。
会議では、まず、６月２１日(金)東北ココからスペシャル「“震災補助金”～被災企業　再生に何が必要か～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、８月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	津田　政克	（七十七証券株式会社　取締役社長）
副委員長	藤村　ゆき	（(株)健康米味楽農場　代表取締役）
委　　員	相原　和裕	（河北新報社　論説委員会委員長）
	桂木　宣均	（日本地下水開発（株）　代表取締役社長）
	坂田　裕一	（ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター 理事長）
	佐藤　美嶺	（防災士）
	鷹山　ひばり	（七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長）
	西内　みなみ	（桜の聖母短期大学　学長）
	八代　浩久	（東北電力株式会社　取締役　常務執行役員）

（主な発言）

＜東北ココからスペシャル
「“震災補助金”～被災企業　再生に何が必要か～」
（総合　６月２１日(金)放送）について＞

○　補助金に頼った過剰投資が問題だったのか、販路が途絶えて復活できないのが問題なのか、それぞれ企業が抱える問題とその原因もさまざまで全てに当てはまるような解決策が見当たらないという厳しい現実がよく理解できた。
　国や自治体にできることは、返済の猶予くらいで、企業の創意工夫で自立するしかないのかもしれないが、水産業、水産加工業は宮城県の基幹産業の一つでもあるので、何か支援策がないかと探っていく番組の基本姿勢に非常に賛同した。被災した企業に今何が必要なのかという点はあまりよく見えないままに終わってしまったようにも感じたが、問題そのものを広く知ってもらうという意味では、有益だったと思う。

また、３人のゲストの発言は、それぞれ納得できる部分が多く、人選が適切だったと思った。

成功事例として、熊本地震で被災した工業製品の工場が紹介されたが、東日本大震災で被災した企業とは状況が違う面もあり、何かのヒントになればいいが、この紹介についてはやや疑問に思った。

○　震災補助金を借りてから５年で返済を始めなければならないが、果たして５年で事業が安定するのか、そこが大きな問題だったように思う。もし災害がなかったとしても、仕事が減って事業が成り立たなくなっていた会社もあったのではないか、また、震災補助金を借りて大きな仕事の賭けに出た人もいたのではないか、そういった点ももう少し掘り下げてほしかった。

日本の法律には災害が起きた時のことを想定した規定があまり見られず、柔軟な対応ができないので、法改正が必要なものもあるのではないかと思った。

もっと問題提起をするような内容になっていればよかったと思う。どうにもならない、やりきれない思いが残った。

○　３人のゲストがそれぞれの意見を述べて、対立する場面もあり興味深く意見を聞いた。印象的だったのは、「栄養失調の体に栄養過多の支援があり、それで消化不良を企業が起こしてしまった」、「前向きなダウンサイジングや縮んで伸びるということも実は必要だったのではないか」という名古屋大学大学院齊藤誠教授のことばだ。熊本地震の場合は、補助金を使って被災前と同じ設備ではなく、新たな展開ができたという話があり、なぜ東北ではできなかったのか、不条理だと感じた。

また、水産業は日本国内で考えると縮小しているが、世界規模で考えるとこれからの発展が期待されるという話があった。今後どのように発展につなげていけばいいのか、問題提起をしてもらった気がする。

また、私的資産へ公的な補助をすることに対して、納税者の公平感を考えなければいけないという意見も興味深かった。

○　東日本大震災の被災地と熊本地震の被災地で、グループ補助金の比較がされたが違和感があった。東日本大震災は、津波による被害だったため現物が確認できない状態だったが、熊本地震では揺れによる被害だったため、壊れたものを確認して金額が決定できたという違いがあるため、単純比較は難しいのではないかと思う。

グループ補助金の説明はもう少し丁寧にしてもよかったという印象だ。グループ

を作らないともらえない補助金である理由の説明がなかったので、その後のことを考えるのが難しくなってしまったと思う。

また、グループ補助金はあくまでも補助金なので、返済の必要はないが、番組を見ていると、グループ補助金に対して返済をしなければならないという印象を受けた。補助金に対しての返済ではなく、総額のうち自己負担にあたる４分の１を高度化融資を利用して用意した人が返済するという説明をきちんとした方がよかったと思う。誤解を与えないように工夫してほしかった。

今回の番組で課題をリアルに取り上げたことで、事業者が自分の事として考えるきっかけをつくったと思う。メディアの大きな力だと思った。

○　この番組は問題提起をしてくれた、とてもいい番組だったと思う。グループ補助金が熊本地震では改善されて使いやすくなったことやグループ補助金を使って失敗した例と上手に使った例、縮小して頑張ろうとしている企業など、さまざまな事例が出てきたが、どうしても失敗した人たちを責める気持ちにはなれない。東日本大震災の大きな被害の中で、地域の期待や従業員の雇用を守らなければならない、地域のために頑張らなければいけないという思いからグループ補助金を借りた人は少なくなかったと思う。失敗した人を責めても仕方がないと思った。

また、３人のゲストの意見の違いが明確でよかった。特に被災地で支援活動を行うぐるぐる応援団代表の鹿島美織さんの意見が被災地の現実をきちんと捉えていてよかった。

○　東日本大震災の被災企業の再建は簡単なことではないことを広く知ってもらうために意義のある番組だったと思う。今、苦境に立っている企業は、震災後いち早く動き出した企業が多いということだった。当時は自分たちが地域を元気にしていく、雇用を守るなど使命感を持ってグループ補助金も使って再建したと思うが、すぐにうまくいくものではなく、厳しい現実があることを番組を通して直視させられた。

熊本の事例については、東北の問題として捉え直して、最後にまとめて紹介した方が分かりやすかったと感じた。途中でその内容が入ったことで番組が広がり過ぎた感じがした。また、気仙沼市の水産会社が、コンサルタントのアドバイスで作業工程を改善して利益が上がったという紹介については、グループ補助金の問題ではなくて企業としては当然の改善活動でもあり混同しているように感じた。問題の論点がずれてしまったように思った。

ゲストの「縮んで伸びよ」などのことばは、他の企業にも参考になる内容だった。今後も被災した企業の復活に焦点を当てた番組をつくってほしいと思った。

○　東日本大震災と熊本地震の単純比較は難しいが、今後の日本における災害対策を考えたときに、被害の面積や産業構造の違いを捉え、しっかりと対応できるような補助制度が求められるのではないかと強く感じた。

また、ゲストが補助やいろいろな制度について、受益と負担の整合がとれていなければ長続きしないと指摘していて全くそのとおりだと思った。ただ、被災地域外に住む人にとっては、自分たちの税金が被災地域に使われる事に対して、自分たちに受益があるのかという考えになってしまうとうまくいかないと思う。税金を投入するのであれば国民に対して説明する場を作ることも考えていく必要があると思った。

事前復興の仕組みが重要になってくるという指摘があったが、非常にいい考え方だと思った。今後の災害に対して国も自治体も企業も、あるいは住民一人一人も含めて、さまざまな災害に対する備え、あるいはＢＣＰ（事業継続計画）について真剣に考えて、それぞれ責任、役割を踏まえながら統合していくような政策が求められると思う。今後も番組で取り上げていってもらいたい。

○　グループ補助金の自己負担分の返済はとても大きな問題。被災して苦しい状況の企業を助けるはずの補助金制度の不可解な点や仕組みに疑問が多くあることを番組を通して知ることができた。グループ補助金の説明を模型などを使い丁寧にしていたと思う。「体力に合った処方箋が必要だった」と話す補助金利用者のインタビューはとても印象的だった。

熊本地震では制度の見直しがされ、被災前と同じものではなく、最新の機械を導入することができるようになったという事例を見て、いかに東日本大震災が日本中を揺るがす想定外の地震で、日本中が冷静に判断できなかったことが今ならよくわかると感じた。

最後は、成功例を出して暗い感じを残さず明るい話題でまとめた印象だが、もっと根深い問題があると思う。倒産した企業がなぜ失敗したのかという正面から見た問題点ももう少し聞きたかった。タイトルにもある被災企業の再建に何が必要かという点について、最後まで解決策は見出せなかった。この問題は、さらに深刻化すると思うので、今後も継続して取材していってほしい。

○　熊本地震と東日本大震災は単純に比較できないというのが第一印象だった。被害の大小で比べてもだめだと思う。比べすぎると東日本大震災で被災した方々が努力しているのにしてこなかったと見られかねない。

東北の沿岸部で壊滅的な被害を受けた企業・産業にとってグループ補助金は復興に大いに役立ったという印象がある。これがもしなかったら、人口減少はもっと大きく進んでいたのではないかと思う。震災から８年あまりが経過してグループ補助金以外の自己負担に伴う借り入れの返済が始まっていて、それが足かせとなって厳しくなる会社も多い。それを乗り越えようと一生懸命、取り組む企業もあるが、できていない企業もある。最後は自己責任となる面もあると思う。

番組では、グループ補助金は画期的な制度である一方で、税金を個人の資産に充てることの難しさ、制度設計の難しさもあると伝えていた。熊本でのグループ補助金は東日本大震災のときとは違い、一歩進んだ制度になっていたのは確かだ。東日本大震災での教訓からもっといい制度にするためにはどうしたらいいのかを考えていくべきだと感じた。その意味で、企業の現状を伝えて問題を深掘りし、解決の糸口を探す手助けになる有意義な番組だったと思う。

（ＮＨＫ側）

グループ補助金は、東日本大震災のあとにできた制度で、それが熊本地震や西日本豪雨でも利用されている。熊本などでどのように使われているのかを調べたところ、東日本大震災での反省を踏まえてバージョンアップされていることがわかった。番組の意図としては補助金の制度がどのように進化したのかという点を比較するつもりだった。産業基盤や被害の大きさの違いも十分理解はしていたが、あくまでも制度の違いを伝えたいと思って熊本のケースを出した。

グループ補助金の説明については、冒頭で模型を使って概略を説明し、高度化融資の４分の１は返す必要があることは伝えたが、もう少し詳しく説明に時間を割いた方が視聴者には伝わったのかもしれない。いただいた意見は今後の参考にしたい。

３人のゲストは被災地の実情に詳しい方、公的な補助金制度の専門家、被災企業の実態に詳しい方という、あえて視点が異なる方を選んだ。打ち合わせの際に、いくら時間がかかっ

てもいいので積極的に議論してほしいと伝えて収録に臨んだので、議論が活発になったのだと思う。

東日本大震災での失敗を繰り返さないためにも、今後もどうすればいいのか問題点を掘り下げる番組を今後も制作していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　６月１９日(水)師弟物語～人生を変えた出会い～「田中将大×野村克也」(BSP 後9:00～9:59)を見た。絶対的なエースの岩隈久志投手がいながら、ルーキーの田中投手を開幕投手にしたという秘話、田中投手が初登板で打たれベンチで悔しくて涙ぐんでいる様子を野村監督がちらっと横目で見ている映像など、これまで全く知らなかったエピソードがたくさんあり、野球の奥深さを満喫できた。

インタビューで田中投手は野村監督を「師ではありません。監督は監督です」と言い、野村監督は田中投手を「弟子ではない」と言っていておもしろかった。そうすると「師弟物語」という番組タイトルは無理があるのではないかと思う反面、番組全体を通じて見ると２人は深いところで共感して、それでつながっている。本人の思いはともかく、本物の師弟だと感じた。

インタビューしたスタジオも野球のマウンドをイメージしたセットや少し明るさを落としたナイターのような照明など、いい雰囲気を醸し出していた。

日本とアメリカのスタジオを同時に結んでインタビューしていたわけではないが、２人とも相手の発言を聞いた上で答えていた。どのように撮影したかが気になった。番組の中で、説明があってもよかったと思う。

○　６月２２日(土)「大好き・東北　定禅寺しゃべり亭～小林よしひささん～」を見た。山形県沖地震の直後だったこともあり、冒頭でウド鈴木さんが地震についてコメントしてくれたことがよかった。小林さんの名前を６歳の子どもが書いていたり、会場に親子連れが多く、子どもたちの声も聞こえていて、やわらかい雰囲気で、いつもと違った印象だった。子育て世代にこの番組を知ってもらういい機会になったと思う。

デビュー前の佐藤弘道さんとの共演映像やプレッシャーを乗り越えて１４年間やり遂げた思いなど、興味深い話ばかりだった。ただ、東北とのつながりや思いがこれまでのゲストに比べて少ない印象だった。東北は肥満傾向にある子どもが多いと

言われているので、子どもと一緒に室内でできる体を使った遊びなどを教えてもらう企画があってもよかったのではないか。小さいお子さん連れの方が多かったので、途中で寝ているお子さんもいた。前方に床座りにして子どもと一緒に座って見られるエリアをつくってもよかったのではないか。

○　６月２４日(月)ノーナレ「画面の向こうから―」は、技能実習生として縫製工場で働くベトナム人女性が主人公のドキュメンタリーだった。劣悪な住環境の中、休みもほとんどなく、低賃金で長時間労働を強いられる様子が描かれていた。受け入れ企業の悪い面ばかりが見えてしまい、いつもの「ノーナレ」とは違う印象だった。技能実習生を受け入れる企業の多くが同じような対応をしていると思われないかと心配になった。主人公の女性にだけスポットを当てた番組だとは思うが、企業側への配慮も必要だったように感じた。

　また、インタビューがベトナム語なので、画面の文字がいつもより多く「ノーナレ」ではなくなっているようにも感じた。こうした内容は、「クローズアップ現代＋」など、問題提起をするような番組のほうが受け入れやすかったのではないか。

　技能実習生の実情を把握して、問題があれば管理をする行政もきちんとした対応につなげていくきっかけになればいいと思った。

○　６月２４日(月)逆転人生「逆転の日本酒　世界に羽ばたく」を見た。全国有数の売り上げを誇る山口県の酒造メーカーが、倒産寸前から立ち上がる逆転劇が描かれていた。その会社の日本酒が人気になった理由、その魅力がよく理解できた。

　社長の桜井博志さんが、研究の積み重によって新しい酒造りを成功に導くという過程が非常によくわかった。

　桜井さんのお酒の名前の付け方や精米歩合の話題性で売り込んでいく姿から、経営者であり、スーパー営業マンだと感じた。海外でもフランス料理店など、飲食店に直接営業に行くなど、少し視点を変えることで成功への道を切り開いていた。

　人生のどのあたりを今紹介しているのかを表にしていたが非常にわかりやすかった。さらに桜井さんご本人がスタジオに出演して、そのときに何を思っていたのかを語る演出もとてもよかった。

○　６月２５日(火)プロフェッショナル　仕事の流儀「腰痛治療、いまだ進化せり～腰痛専門医・西良浩一～」を見た。日本人の４人に１人が腰痛を抱えている中で、そういった人たちに元気を与えた番組だったと思う。

西良さんが腰痛の原因を見つけるために一番大事にいているのは問診だった。どんなときにどんな痛みがあるのかを見極め、最後に画像で確認するのがポイントだということだった。痛みの原因を特定する力と、内視鏡手術のスキルが高く評価されているが、絶え間なくスキルアップにも励んでいて感心した。また、手術中に「今、順調ですよ」と、患者に一声かけている姿が印象的で、本当に患者の目線に立った名医だと思った。

○　６月２５日(火) クローズアップ現代＋「夫婦の会話を科学する～不満解消の秘訣（ひけつ）は！？～」を見た。夫婦の会話を改善するというのは非常におもしろかった。通常の「クローズアップ現代＋」とはひと味違う内容で、時々はこうした内容も取り上げてほしいと思った。

○　６月２８日(土) ドキュメント７２時間「断食　空腹の向こうがわ」は、静岡伊豆高原にある断食をする施設に集まる人たちのことばを丁寧に拾って意味や価値を見いだした番組だった。「とにかく自分のことだけを考えられる時間・空間」、「自分を大切にできる」ということばが印象的だった。さまざまな立場の人たちが集まり、それぞれに「何かを変えたい」という思いがあり、空腹の先にいろいろな人間模様を見ることができた。

○　６月２９日(土)猫のしっぽ　カエルの手　２０１９～　初夏　京都・大原　ベニシアの手づくり暮らし～（E ﾃﾚ　後 3:00～3:49）を見た。ベニシアさんが年を重ねても、変わらずすてきな感性を持った方だということが番組を通して伝わってきた。視力の衰えを感じているそうで、淡路島の園芸療法を学べる学校で、感触や音、香り、味覚で植物を楽しんでいる姿は、まるで少女のように無邪気で、とてもすてきだった。ニホンミツバチの養蜂の場面でも、五感をフルに使って楽しんでいる姿が印象的で、自然がくれるパワーを番組から感じることができた。番組の最後にベニシアさんが英語で詩を読み上げるがとてもすばらしいと思う。

映像、音楽、声が心地よく、見るだけで幸せにさせてくれる番組だ。ぜひこれからも続けてほしい。

○　６月２９日(土) ＮＨＫスペシャル　東京ミラクル第２回「巨大鉄道網　秒刻みの闘い」を見た。首都圏の鉄道の複雑さが改めて分かり、東京のすごさに感心した。近年、他路線との接続が３２カ所増えたと紹介があったが、首都圏の接続は果たし

て全部で何カ所あるのかもう少し詳しく知りたくなった。

番組は、ＪＲ東日本東京総合司令室の様子と、俳優の佐藤健さんが首都圏の鉄道を使った小旅行をする様子をクロスさせるという、飽きさせない演出に感心した。

東京総合指令室の映像は、４月１１日の通勤時間帯に発生したトラブル対応の非常に緊迫感ある状況を映し出していて、司令室の方々の苦労を肌身で感じることができた。私鉄の運転主任が、「自分は一つの歯車であるが、一つ欠けると回らない。頑張ってもっとよい歯車になっていきたい」と話していて、人間社会の本質をあらわしたことばであるなと非常に感銘を受けた。

番組のエンディングで、「お客様同士のトラブルで遅延しています」というアナウンスが流れた。駅員のせいではない原因で電車が遅れても「申しわけありません」とアナウンスをしていて、果たしてそれはどうなのだろうかと考えさせられた。次回も期待している。

○　７月３日(水) 歴史秘話ヒストリア「よみがえる大坂の陣　幻の金屏風　誰が描かせたのか」を見た。興味を引くようなすばらしいタイトルで思わず見入ってしまった。夏の陣は立派な金屏風があったが、冬の陣の屏風はくすんだ赤以外ほとんど色がない下書きとされるものしか残っていなかった。色の指示は書かれていたのでそれを基に最新のデジタル技術で復元して、重厚な金屏風を完成させていた。デジタル技術のすごさに目を奪われた。歴史的資料の情報は文字情報が多いのではないかと思うが、絵画に基づく情報も非常に情報量が多いということを改めて感じた。後半に、誰が何の目的で冬の陣を描かせたのかという本題に入り、大きく２つの可能性があることが紹介された。

これまでは博物館や美術館に行って屏風絵や蒔絵を見てもそれほど考えなかったが、絵からも情報がいろいろ得られるという新しい視点ができたので、より歴史を楽しむことができそうだ。ただ、その仮説だけで終わってしまったことが残念だった。例えば当時の政権構造や財政基盤など、戦いだけではない社会的な背景がもう少し深掘りされて紹介されていれば、もっと興味を引いたのではないか。

○　７月６日(土) ＥＴＶ特集「反骨の考古学者　ＲＯＫＵＪＩ」は、弥生研究に生涯をかけた森本六爾さんという考古学者の物語だった。当時の通説と異なる稲作文化の起源を真っ向から主張していく。新しく出てきたものは徹底的につぶそうとする学会や学者に勇気を持って闘う姿勢がすばらしいと感じた。森本さんは若くして亡くなったが、後にいろいろな発見からその学説が正しいことが証明された。現代で

も学会や研究者の世界は閉鎖的な分野もあると思う。それを解いていく一助となる番組を今後も制作してほしい。

○　７月１０日(水)クローズアップ現代＋「豪雨被害を拡大！？あなたの町のダムは安全か」は、ダムがどうあるべきかを考えさせる非常にいい番組だった。気がつきにくいが、命に関わる問題を掘り起こし、単に危機感をあおるだけではなく、対策も含めて紹介していてよかった。

川の上流にダムがあるから大きな洪水から守られていると思いがちだが、実は、治水義務のない民間所有のダムもあるという意外な事実を初めて知った。民間所有のダムは、大雨が予測される場合に、事前にダムの水を放流して水位を下げて余裕を持たせておくという措置もなかなかできない。予想が外れて雨が余り降らなかった場合は、今度は渇水の心配があるので十分対応できないという意外な事実も初めて知った。そこで、ダムの水量のうち治水部分と利水部分に分けて、治水部分は国が買い取って、国の責任で事前放流させるという最近の対策も紹介されていて、納得できる番組構成だった。

東北でも豪雨災害の備えが十分なのか、下流域の堤防の整備も含めて一度検証してみる価値があるのではないかと思った。

○　７月１１日(木) ネーミングバラエティー　日本人のおなまえっ！【松！杉！柳！樹木のつく名字】を見た。日本国内で樹木に関係する名字は、700 種類以上あるということで驚いた。それぞれの樹木が持っている意味合い、その樹木によって日本におけるイノベーションがそのつど行われていたということが紹介されていた。それぞれの木の特性が、名字の由来や分布する地域にも大きく関わっているという紹介で興味深かった。今回は樹木がテーマだったが、今後もさまざまなテーマで番組をつくっていってほしい。

○　７月１２日（金）東北ココから「閖上に響く笑い声　～かわまちてらすの第一歩～」(総合 後 7:30～7:57　宮城県域)を見た。４月にオープンした名取市閖上の商店街で美容室を経営する中橋栄子さんに焦点を当てていた。お客さんを笑わせたり、笑顔が絶えない中橋さんだったが、その笑顔に至るまでどんな苦労があったのだろうと思った。東日本大震災で店を失い、美容師を続けることを諦めそうになっていた中橋さんに常連客の女性がかけたことばが印象に残った。ふだんパーマをかけないその常連客が「私にパーマをかけて」と励まし、泣きながらパーマをかけたとい

うエピソードだった。美容室に集まってくる人たちも、震災で何かを失ったり、今まで経験したことのない恐怖を経験したり、一人一人の表情から、震災時のつらさとその後の苦労を想像せずにはいられなかった。賑わいを取り戻した閖上に人々の笑い声が響き続くことを願わずにはいられない、そんな思いを抱かせてくれる番組で非常によかった。

○　７月１２日(金)きんよる秋田「にっぽん百名山　栗駒山」(総合 後 7:30～7:57　秋田県域)を見た。「きんよる秋田」は、秋田放送局が制作した番組だけではなく、過去に秋田県を取り上げた番組をもう一度放送することがある。金曜日の夜に家族が安心して楽しめる番組が多いので、秋田の人にとってとてもいい番組だと思う。

今回は、今の季節にぴったりな初夏の栗駒山の紹介だった。山岳ガイドの方と一緒に歩きながら対話しているような演出で、自分も登山しているような気持ちになれてとてもよかった。実際に登らないと見られない花や変化に富んだ不思議な県境の山肌など、宮城・岩手・秋田にまたがる絶景は迫力があった。栗駒山から見た鳥海山や月山の絶景は感動的だった。山に入るときのルールや服装も参考になった。初心者コースの紹介だったので、興味を持つ人も多かったのではないか。今後は、８Ｋの高精細映像も期待している。

○　７月１２日(金) 再発見いわて「俺たちにバックギアはない　～被災地から描く水産業の未来図～」(総合 後 7:30～7:57　岩手県域)を見た。大船渡市の水産加工会社の代表と三陸漁業生産組合の漁師たちが、新しい水産業を起こしていくという内容だった。東日本大震災で、全てを失ったが、「これだけなくなれば気持ちがいい」と立ち直っていく。特殊な冷凍技術で魚の身の弾力を保ち、今まで使っていなかった魚をさまざまなところに転用していく、台湾まで行って販路を広げていくなど、アクティブな活動をしていく。利益は上がっているのかは分からなかったが、将来性を感じられ、応援したいと思える内容で好感を持った。被災地は、生活も文化も一度なくなってしまった中で、自分がどう生きていくかという生き方まで問われているのだと感じた。

○　７月１３日(土)ＮＨＫスペシャル「夢をつかみにきたけれど　ルポ・外国人労働者１５０万人時代」を見た。146 万人を突破した外国人労働者の中で、急増が著しいのがベトナム人で、東京港区にある寺の尼僧タム・チーさんの元には、ベトナム人の技能実習生や留学生がさまざまな相談をするために集まって来ており、長時間労

働や賃金の未払い、パワハラなどの問題、不慮の死や自ら命を絶ったベトナム人の遺体の引き取りや供養など、タムさんを中心にさまざまな問題があらわになってきた。

少子高齢化、人口減少などで、海外に人材を求めざるを得ない時代になってきている。人材の質を確保するために、公的機関が外国人材の能力などをきちんと見定めて、必要な企業とマッチングさせるシステムが必要だと思う。現在の問題点をより掘り下げ、番組で取り上げてほしい。

○　７月１４日(日) 明日へ　つなげよう「“１１の命”とつなぐ未来～福島　大熊発の挑戦～」(総合 後 10:15～10:58)は、さわやかな気分にしてくれる番組だった。東日本大震災後、帰還困難区域で大量殺処分されてしまった牛の映像を見た谷咲月さんという女性が８年間で、「もーもーイレブン」という１１頭の牛を使って、雑草の生い茂った荒れ果てた農地を牧草地にかえていく取り組みを丁寧に追いかけていた。応援する人もいれば、自分の大切な牛をなくしてしまい複雑な心境で協力できない酪農家、遠くからバスツアーで応援に来るボランティアなどさまざまな立場の人たちへの取材もされていた。1 人の女性の行動によって、人が住めるようになるのではないか、もう一度農業ができるようになるのではないかという希望を持てるような内容だった。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０１９年６月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、２０日(木)、ＮＨＫ仙台放送局第１会議室において、７人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、６月７日(金)東北ココから「我、葉を思ふ」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、７月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出 席 委 員）

副委員長	藤村　ゆき	((株)健康米味楽農場　代表取締役)
委　　員	相原　和裕	(河北新報社　論説委員会委員長)
	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター 理事長)
	佐藤　美嶺	(防災士)
	鷹山　ひばり	(七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長)
	西内　みなみ	(桜の聖母短期大学　学長)
	山田　理恵	(東北電子産業（株）　代表取締役社長)

(主な発言)

＜東北ココから「我、葉を思ふ」
（総合　６月７日(金)放送）について＞

○　番組全体がゆったりと時が流れるような構成で、お茶の味わいを画面から感じることができた。茶匠の矢部亨さんが話すさまざまなことばが心に響いてきて、改めてお茶の良さを感じた。中村梅雀さんのナレーションが最初は合わないのではないかと思ったが、ゆったりとした口調が後から味わい深く感じられた。

一つ気になったのは、「北限のお茶」という表現だ。例えば、岩手県の気仙地方でもお茶の栽培をしている。そこでお茶文化を守っている人たちもいる中で、今回の番組では、「北限」ということばが使われて、それより北のお茶文化が消されてしまうのではないかと心配になった。北限という表現を使う場合は、きちんと事実か検証してから使ってほしかった。

仙台放送局には、宮城県に限らず、東北全体のことも視野に入れて、地元の放送局と連携しながら番組をつくってほしいと思う。

（ＮＨＫ側）

宮城県以北にも茶畑があることは知られている。また「北限」ということばは、宮城以南の埼玉や茨城でも使われる場合もあり、それぞれの産地で解釈や基準が異なっている。今回紹介した茶畑は、栽培面積や収量が一定量あり、年間を通じて店舗販売、通信販売をしている。今回の茶畑より以北に、お茶の生産だけで生業として成り立つ生産農家が存在していないため、「北限と言われる」と表現した。

○　ＮＨＫが放送するということは、影響力が大きい。北限という表現に対して、問い合わせはなかったのか。

（ＮＨＫ側）

視聴者から「北限」という表現が気になったという問い合わせは１件あった。それに対しては、一定の数量をつくっていることと、「北限と言われる」という断定した表現は使っていないことを説明した。

○　この番組を見たとき、北限ということばがどういう意味なのか、定義は一体何なのかと考えてしまった。北限で努力してものをつくっている地域では、生産者はもちろん地域の人も誇りを持っていると思うので、北限ということばを使う際には注意が必要だ。番組の最初で、その定義づけをきちんと説明するべきだったのではないか。

今はペットボトルに入ったお茶が簡単に手に入るようになったが、昔はお茶や水はお金を出して買うものではなかった。こうした変化は、何をもたらしたのか、生産者はどのように考えているのか、その点をもっと深めてもよかったのではないか。東北は、九州、静岡に比べて、生産量が少ないので知名度がないのは当たり前。知名度がある、ないではなく、それ以上に価値あるものを作っていることを番組で打ち出すことができればもっとよかったと思う。

○　お茶を飲みたくなる番組だった。梅雀さんのナレーションが、最初はしっくりこないと思っていたが、見ているうちに、落ち着いた詩を読むような感じでとてもいいと思った。

農家の佐々木さんの茶畑が本当に美しく、特に朝もやの中の光景には感動を覚えた。また、矢部さんが愛情を持ってブレンドして出すお茶は本当においしそうに見えた。

佐々木さんが、お茶の木は、農家が何回来てくれたかがわかり、それで味が変わると話していたが非常に興味深かった。佐々木さんの茶畑に対する愛情、販売を行う矢部さんの思いが、番組のタイトルの「我、葉を思ふ」につながっていて、いい題名だと感じた。ものづくりに対する思いやプロ意識に非常に感動した。

○　タイトルがとてもよく、番組全体を通して、飲むお茶ではなく、お茶の葉への強いこだわりが感じられる内容になっていたと思う。

農家の佐々木さんのお茶栽培に対することばが印象的で、茶の木に落ちた木の葉を丁寧に取り除く姿から、大切に茶畑を育てていることが伝わってきた。樹齢が５０年の老木とコメントが入ったが、なぜその老木を大切にしているのか、その理由をもう少し掘り下げて伝えてほしかった。

お茶の葉を愛する矢部さんの話にも引き込まれた。茶匠としてのこだわりよりも、お茶を栽培している農家の方に対してのことばが多く、背景に茶畑が広がるような感じがした。

東北のお茶は､知名度が低いが､わざわざ東北のお茶を選んで買いたくなるような、東北のお茶を誇れるような番組になっていたと思う。

○　番組の中で、矢部さんのお店を訪れた小学生の男の子が、お茶を飲んだときの表情がとてもよくて､この番組のメインである矢部さんや佐々木さんと並んで､あの瞬間､番組の主役になっている感じがした。取材中に偶然出会ったとすると、とても幸運だったと思う。矢部さんの飾らない人柄が会話にも出ていて､「おんちゃん、疲れ吹き飛んだや」と自然と笑いを誘う場面になっていた。

今回紹介されたお茶は、宮城県の人にもあまり知られていないと思う。農家、販売する人、それぞれお茶にかける熱意、情熱がひしひしと感じられて、番組を見てこれからも頑張ってほしいと思った視聴者は多いと思う。お茶農家の高齢化、お茶の消費量の減少などの課題は、今回は意図的に割愛したと思うが、それがかえって番組全体に前向きな明るい印象を与えていたと思う。

○　番組を見終わって、お茶を飲んでみたいと思わせてくれたので、その点でとてもよくできていたと思う。

「我、葉を思ふ」というタイトルだったので、佐々木さんの挑戦をもっと知りたいと思った。佐々木さんがお茶に携わって５５年､茶の木の樹齢は５０年､どのタイミングでどのように植えて、どうしてあんなにこだわりを持って大切に育ててきたのか、お茶の木に対していろいろ興味を持った。美しい茶畑の風景が印象的だったこともあり、そのあたりをもう少し掘り下げてほしかった。

○　冒頭の美しい茶畑の映像、茶の魅力を物語のように語りかけるナレーションが神秘的で、映画を見ているようだった。本当にお茶が飲みたくなる番組だった。

東北でお茶を栽培することの苦労や真面目にお茶に向き合う佐々木さんの姿に感動した。

矢部さんのお店に来た小学生が、目をキラキラさせてお茶を飲むシーンは、とても印象的だった。小学生を正面ではなく横から映していたが、飲んでいるときの表情がしっかり伝わる撮り方だったと思う。

茶農家や販売者に焦点を当てることによって、この商売に携わる人たちの起爆剤となり、東北のお茶に注目が集まってほしいと感じた。

この番組は、農家の技を伝承するような番組にもなり得ると思った。茶の栽培、製造の工程をもう少し掘り下げることで、後世に伝承していく番組にもなると思う。映像を大切にとっておいて、別の形で番組にすることも検討してみてはどうか。

○　お茶が宮城県で栽培されていることに驚いた。茶農家の佐々木さんが少しでもよいお茶を作るため、正直に実直に努力する姿と、矢部さんのお茶にかける情熱、新たな魅力でお茶文化を盛り上げようとする姿が描かれていて、２人の思いが伝わってきた。佐々木さんのお茶は品質の高さからあえてブレンドせずに販売していて、２人のお茶に対する自信と愛情が感じられた。

宮城のお茶は、伊達政宗の産業振興策として栽培が広がり、お茶文化が根づいたと言われており、それについての伊達政宗の手紙の紹介もあり、納得できる内容になっていた。

矢部さんが接客する時に、地元のことばで親しみやすい雰囲気だったのが印象的だった。お茶が人に和みや至福の時をもたらすことを、ことばや雰囲気からも伝えるいい場面の捉え方だったと思う。

（ＮＨＫ側）

ペットボトルに入ったお茶の登場などで、お茶の栽培、販売の現場ではさまざまな問題が起こっている。お茶一つとっても深いものが見えてくることは、制作しながらも感じていた。今回は、茶畑や山並み、空と茶畑が溶け込むような一体感のあるすばらしい風景をしっかり描くことに注力した。撮影機材も工夫し、映像の美しさを追求した。当初は、矢部さんを中心に番組を構成することを考えていたが、矢部さんの「生産者あっての我々だ」ということばもあり、佐々木さんの茶畑のシーンを増やして、生産者をきちんと記録に残しておくことに重点を置いた。指摘された

部分を考慮しながら、今後も取材をしていきたいと考えている。

＜放送番組一般について＞

○　５月１８日(土)ニッポン印象派「芭蕉の見た光」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後6:00～6:29)は、映像がすばらしい番組だった。人間が自分の目で実際に見る以上にカメラはきれいに風景を捉えるので、絵画作品のようにも思えた。ただ、スローモーション、早送り、空撮などがふんだんに使われているのは、自然の風景を対象にしているだけに、不自然な印象も受けた。映像に技術的な演出を加えるよりも、自然な映像を重視してほしいと思った。

また、芭蕉役が、絶景を前にすると「おおー」や「ああー」としか言わなかったことが残念だった。奥の細道は、紀行文としてもすばらしいので、その文章を読み上げてもよかったのではないか。

東北の美しさを見直す、いいきっかけになる番組だったが、秋田の象潟も紹介してほしかった。

○　５月２８日(火)イッピン「進化する　暮らしの器～岩手　南部鉄器～」を見た。南部鉄器は、主に盛岡市と奥州市の２つの産地で作られているが、それぞれの工法の違いを明確に出していてよかった。日用品の美術については用の美という言い方をするが、南部鉄器も用の美だと思う。番組でそのことばは出ていなかったが、伝統的な部分だけでなく、現代の暮らしにも寄り添った形の南部鉄器も紹介されて、その魅力がよく伝わる内容だったと思う。

○　６月１日(土)「大好き・東北　定禅寺しゃべり亭～澤穂希さん～」を見た。サッカー女子ワールドカップフランス大会の開幕１週間前の放送で、タイミングがとてもよかった。サッカーに興味がない人でも、冒頭の紹介映像で澤さん自身の魅力を入り口に番組に入りやすくなっていたと思う。仙台での生活、特に娘の映像や話のときの表情は、サッカーをしているときとは違い、優しい笑顔で、澤さんの人柄がより伝わってきた。

「東北元気めし」は、ウド鈴木さんと隊員の猪股真衣キャスターのコンビで、落ち着いた進行で好印象だった。

ゲストがステージに出る前に、カメラに向かって、名前を言ってあいさつする場

面があるが、背景が木の板であまりテレビ向きではないと思う。例えば、番組のポスターや今まで出演したゲストのイラストを貼るなど工夫があってもいいのではないか。

６月８日(土)の「大好き・東北　定禅寺しゃべり亭～秋吉久美子さん～」の回もとてもよかった。生き方、考え方がしっかりしていることが伝わり、こういう女優さんだったのかと改めて感心させられた。

毎回、東北にゆかりのあるすばらしいゲストが登場するので、毎回楽しみだ。今後も楽しい番組づくりに期待している。

（ＮＨＫ側）

これまで出演いただいたゲストの似顔絵は、来局者に見てもらえるように展示しているが、ご意見を参考に検討していきたい。また、「東北　元気めし」のコーナーは、「東北 復興めし」から名前を変えて、被災地だけではなく、東北６県のさまざまな食を取り上げられるように変更している。引き続き、よりよい番組作りを目指していきたい。

○　６月８日(土)「大好き・東北　定禅寺しゃべり亭～秋吉久美子さん～」を見た。秋吉さんのイメージが変わり、新たな発見があった。６歳から１８歳まで、福島で過ごしていて、そのときのさまざまな経験が、今の秋吉さんにつながっていた。アメリカへの留学や５０代で大学院に入学した経験、さらに東日本大震災の復興支援にも携わっていることが紹介されとてもいい内容だった。

○　６月２日(日)ＮＨＫスペシャル「彼女は安楽死を選んだ」は、本当に衝撃的な内容だった。日本では認められていない安楽死をするために、スイスに渡って安楽死を選択した５１歳の女性の話だった。姉２人が見守る中で「本当に幸せだった。ありがとう」と言って、自分自身で点滴のコックを開けて薬を投与し、数十秒で眠るようにして亡くなった。人間はこんなに楽に死んでしまうのか、彼女のほかにも難病を抱えている方の中には、それを選択したいと思うようになる人もいるのではないかと考えさせられた。女性自身の思いや家族の思い、スイスでの現状がとても丁寧に取材してあり見応えがあった。最後に「私たちは命の終わりをどう迎えるのか。大切な人をどう見送るのか」という画面表記があり、考えさせられる非常にいい番組だったと思う。

○　６月２日(日)「ＮＨＫスペシャル」は、難病に侵されてスイスでの安楽死を選んだ５１歳の女性と同じ病気で延命治療を選んだ同年代の女性の２人が登場し、安楽死の

問題をどう考えたらいいかを考えさせる内容だった。尊厳死については、今日本の医療現場では受け入れられつつあると思うが、安楽死に関しては議論がほとんど進んでいない。日本での安楽死について考えていくきっかけにもなったのではないか。

ベッドに横たわり、薬剤の入った点滴のコックを自分で開いて死を迎える、その瞬間まで放映したのには驚いた。これには賛否両論あると思う。姉２人に囲まれて安らかで眠るように死んでいく姿を見ると、安楽死を望む人が増えるのではないかというおそれも感じた。終末期医療や患者本人の自己決定権など、さまざまな問題を指摘した番組だったと思う。

○　６月９日(日)目撃！にっぽん選「この命とともに～ひかるちゃんと家族の日々～」を見た。寒河江市と米沢市の２つの家族が取り上げられていた。医療的ケア児を育てている母親が「子どもに手をかけそうになったら止めて」と夫に頼んでいるという、本音をインタビューで引き出していて、取材する側とされる側の信頼関係がすばらしいと感じた。医療的ケア児が全国におよそ１万８千人いて、十分な支援体制が整わない過酷な状況だが、番組からは健常児と変わらず、子どもの発達、成長が親の支えになり親を育てているという様子が伝わってきた。

○　６月１０日(月)未来スイッチ　“日本語でダイジョウブ”「やさしい日本語で　外国人の避難」(総合 後 11:45～11:48)を見た。短い番組だが、外国人にもわかるやさしい日本語の例も紹介され、表現方法を変えるだけで伝わるといういいヒントになったと思う。英語も日本語も得意ではない外国人も増えているので、災害時など、特に通訳が十分に確保できない場合でも応用できると思う。やさしい日本語を日本人が話すきっかけづくりという意味でとてもいい番組だと思う。

○　６月１１日(火)クローズアップ現代「“性の偏見”取り払えますか？～ＬＧＢＴに寛容な社会のために～」を見た。性の偏見を取り払うために対応し始めている企業が紹介された。大手家具メーカーの取り組みは、個人を尊重し、偏見をなくして働きやすい社風を生み出し、それが企業の成長にもつながっていると感じた。大手生命保険会社では、採用試験の応募書類に写真も性別も記載しないということで大変驚いた。この企業の今後の取り組みに注目したいと思った。

先進的な取り組みが進むスウェーデンでは、国として成長するためには、多様な人材の活躍が欠かせないということから同性愛差別を禁止するなど法律を整備し、国を挙げて意識を変えていったということだった。こういう先進的な取り組みを今後も取材して番組にしてほしいと思った。

○　６月１４日(金)きんよる秋田「あきた鉄道出会い旅　～羽越線編～」を見た。旅人が、中川安奈アナウンサーから倉沢宏希アナウンサーにかわった。倉沢アナウンサーは表情がとてもよく、困った顔や嬉しい顔が、ことばを出さなくても伝わってくるいいキャラクターだと思う。番組の内容もラーメン屋さんの夫婦愛や令和初日に入籍された夫婦の物語など、感動する部分もあってとてもよかった。残念だったのは、新屋駅で一つも取材ができず、番組内で何の話題も作れなかったという結末になったことだ。名物が何もない地域と捉えられてしまったのではないかと心配になった。もう少し工夫はできなかったのだろうか。

（ＮＨＫ側）

予定なしでロケをしているので、その日は新屋駅で取材をさせてもらえる対象が見つからなかった。頂いた意見は、今後の番組制作にいかしていていきたい。

○　６月１５日(土) ＴＶシンポジウム「いのちを守るまちのデザイン～防災まちづくりで大災害に備える」(Eﾃﾚ 後 2:00～2:59)を見た。長時間のシンポジウムを１時間にまとめた番組で、話の流れがつながっていないと思う場面もあったが、テレビで見るにはちょうどよい長さだったと思う。シンポジウムに実際に行けない人にとって、ありがたい内容だと思うが、興味がない人にとっては見たい番組にはならないとも思った。シンポジウムのパンフレットや次第が手元にない状態で見るので、パネラーの所属や名前を何度も紹介していたのはよい工夫だと感じた。

○　６月１６日(日)ＮＨＫスペシャル「モネ　睡蓮（すいれん）　よみがえる“奇跡の一枚”」を見た。上半分が完全に欠落してしまった絵の大規模な修復と科学調査が国立西洋美術館の主導でスタートしたという話だった。デジタル画像による推定復元も進められていて、人間による推定と人工知能による推定という両面から行われていてとても興味深い内容だった。そこに関わる学芸員、研究員、修復師などの頑張る姿に感銘を受けた。ぜひ見に行ってみたいという気持ちになった。

○　６月１８日(火)に発生した地震の報道について、地震後すぐにＮＨＫにチャンネルを合わせた。正確な報道を得られるだろうという信頼性がＮＨＫにはあると思う。
　ただ、急に中継リポートを任されたのだろうが、なかなかうまく話せない人が出

演していたのは残念だった。現場に出す以上は、きちんと報道の仕方を教えていただきたい。新人であっても現場ではすぐにレポートができるように徹底的に教育してほしいと感じた。

○　６月１８日(火)に発生した地震の報道について、早く正確な情報が出てくるので、ＮＨＫへの信頼性は高い。刻々と変わる状況をアナウンサーが的確に伝えていてさすがだと思った。各地の放送局からの中継に切りかわった際、アナウンサーが「地震発生時に私は自宅にいましたが、こういう状況でした」と説明していたが、地震発生後１０分程度で放送局に駆けつけて、出演していることがわかり感心した。ただ、現場からのリポートでは、あまり的確に説明できていない人も出演していて、聞きにくい場面もあったのは残念だった。

○　６月１８日(火)の地震の報道では、英語の表示が充実していた。副音声で英語の情報が聞けることや、２次元バーコードも表示されていた。来年の東京オリンピックに向けて日本を訪れる外国人も増える中で、ぜひ続けてほしい取り組みだ。それから、津波の注意報が出て、海に近づかないでくださいというアナウンスだけでなく、海や川には近づかないでくださいと、「川」ということばが入っているのがよかった。これまでの災害のことを考慮して改善したと思うがとてもいいことだ。

○　連続テレビ小説「なつぞら」を見た。ヒロインの奥原なつが、北海道で農業高校に通っているときに歌っていた日本学校農業クラブ連盟の公式ソング「ＦＦＪの歌」があったが、全国の視聴者からその歌を歌っている動画を６月末まで募集している。しかし番組では現在、なつが東京でアニメーターを目指すストーリーパートに展開していて、その歌はドラマに出てこなくなっているが、今後どのように扱うのか知りたい。北海道編が盛り上がっている時期に募集を締め切ってもよかったのではないか。

（ＮＨＫ側）　札幌放送局が企画したもので、寄せられた動画は、今後、ミニ番組などにまとめて、放送やホームページで紹介していく予定だ。

○　連続テレビ小説「おしん」を見ている。脚本がすばらしく、昭和５８年に放送された時とはまた違った見方ができる。おしんの強い女性像も見応えがあるが、母親

や奉公先の大奥様など、一本筋が通った生き方をしている登場人物が多く、幅広い年代の女性たちが必死に生きてきた時代背景がよく伝わってくる。今、女性経営者に注目が集まることがあるが、経営者のような感性を持った女性は昔から日本社会には多くいて、経済や社会規範、家族関係など、日本の国の基礎を支えてきたのだと改めて感じさせられる。

○　ＮＨＫでは、ＬＧＢＴや発達障害を扱った番組、よるドラ「腐女子、うっかりゲイに告る」など、時代の潮流を捉えて、視聴者の認知を広げる番組づくりを挑戦的にやっていると思う。報道は見えないところに光を当てて私たちに気づかせてくれるものであるべきだと思う。広く知られていない社会的な問題について、多くの人が関心を持てるような取り組みを今後も続けてほしい。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０１９年５月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１６日(木)、ＮＨＫ仙台放送局第１会議室において、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、５月５日(日) 小さな旅「一目千本桜に包まれて～宮城県　白石川堤～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。続いて、「２０１８年度東北地方向け放送番組の種別ごとの放送時間」について、報告があった。最後に、６月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

(出 席 委 員)

委 員 長	津田　政克	((株)七十七銀行　常務取締役)
副委員長	藤村　ゆき	((株)健康米味楽農場　代表取締役)
委　　員	相原　和裕	(河北新報社　論説委員会委員長)
	桂木　宣均	(日本地下水開発（株）　代表取締役社長)
	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター 理事長)
	佐藤　美嶺	(防災士)
	鷹山　ひばり	(七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長)
	長谷川　登	(東北電力株式会社　取締役　常務執行役員)

(主な発言)

＜小さな旅「一目千本桜に包まれて～宮城県　白石川堤～」
(総合　５月５日(日)放送) について＞

○　快晴の中、満開の桜を撮影していたので、映像がとても美しく番組全体にいい印象を与えていた。残雪の蔵王連峰と桜並木のコントラストも北国の春ならではの彩りを伝えていた。ドローンで撮影した映像が効果的だった。雄大なスケールの映像がすばらしく、ドローン撮影の技術の進歩に驚かされた。

高台から見下ろして桜並木を「桜が町を縁取っているみたいだ」という山田敦子アナウンサーのコメントがあったが、とてもすてきな表現で感心した。

この「小さな旅」という番組は、訪れた先で偶然に出会ったように話を進めていく演出だが、事前にお願いしていることが見て取れることがある。予定調和の中で、番組が進行しているようで驚きが少ないような気もするが、日曜日の朝８時という時間帯にマッチした演出なのかもしれない。

○　晴れた青空と満開の桜の美しい映像が印象に残る番組だった。一目千本桜は、全長が８キロあり、平地からはすべてを見渡すことができないが、番組ではドローンも使い全景を映していて圧巻だった。自分の目線では見ることができない映像で、テレビならではの楽しみ方だと感じた。

番組の中で、一目千本桜に集まる人たちの３つのストーリーが紹介されたが、どれも桜に対する強い思いが描かれていて、時間をかけて取材をしたのだろうと感じた。桜は日本人にとって特別な花というイメージがある。番組を見ながら、さまざまな思いを抱いて花見に訪れている人がいることが想像でき、花見会場をまた違った目線で見られるようになった。

「小さな旅」は、日曜日の朝にぴったりのゆったりとした雰囲気の番組だ。これからもすてきな景色とともに、そこで過ごす人の人生や思いを伝えていってほしい。

○　一目千本桜ならではの風景が次々に出てきたが、どのシーンも非常に美しく感心した。番組を見て、来年の４月に見に行ってみたいと思った人も多いのではないか。

単に桜並木の紹介だけではなく、桜とともに人生を歩む人々と出会う旅という番組テーマに沿った出演者だったと思う。ただ、山田アナウンサーが出演者に出会う場面については、不自然さを感じた。偶然に出会ったという設定にせず、お願いしてここに来てもらったと紹介した方がすっきりして見られるのではないか。もう少し自然な演出をしてほしいと感じた。

○　映像がすばらしくて感激した。ドローンの映像や桜のアップ、遠景などあらゆるアングルから撮影していて、改めて一目千本桜のすばらしさを見せてもらった。番組に登場した地元の人が青空で満開の桜が見られるのは　１０年に１回しかないと言っていたが、ちょうどその日に撮影できたというのは、努力の成果だと感じた。

３つのエピソードが紹介されたが、短い時間の中でも印象に残る内容だった。育児と仕事で疲れたときに、一目千本桜に救われたという女性の話の中で、「いつもそばで包み込んでくれる一目千本桜です」というナレーションで締めくくっていたのがとてもよかった。

○　桜並木の景観は、規模が大きく、圧倒されるような美しさだった。桜を扱ったほかの番組も見たが、そちらは赤みがかったピンク色で実際の桜の色とは違うと感じたが、今回の番組は自然な桜の色でとてもよかった。

桜と人の暮らしについて３つエピソードが紹介された。ほっとするような話題で構成されていて、どのシーンもほほえましく、本当にいい番組だったと思う。

○　東北の人にとって春は本当に待ち遠しいもので、桜は、春を告げる希望の花だと思う。長い冬を乗り越えて咲く桜に、人生を重ねる人も多いと思う。短い番組の中にそれがにじみ出ていたと感じた。大河原小学校の特別支援学級の子どもたちが自分たちで作ったコースターを配る話題や、千本桜に感動して歌を作った女性の話題など、中身の濃い番組だった。毎年咲く桜を、毎年心を新たにして見たい、そう思わせてくれるとてもいい内容だった。

○　冒頭の一目千本桜と残雪の蔵王、ゆったり進む屋形船の映像は本当に美しかった。テレビで花見をさせてもらったような気持ちになった。

３つのエピソードの中で印象的だったのは、大河原小学校の特別支援学級の子どもたちの話。子どもたちが手紙とコースターを観光客に渡すときの優しい表情がしっかり撮影されていて、心が伝わる映像になっていたと思う。

一目千本桜に感動して詩を作った女性の話題では、その詩を桜の映像とともに紹介していた。人生を重ねた詩の深さを思わせるすばらしい演出だったと思う。

映像もことばも美しくまとめられていて、朝からさわやかな気持ちになった。

○　さまざまな角度からの美しい一目千本桜の光景だけでなく、その桜のもとで生きている人々の思いを映し出した番組だった。春を待ち、一斉に咲き、そして散る桜に日本人は特別な思いを持っていると思う。桜に対する思いは、人それぞれであることを改めて伝えた番組だった。

今回の番組は、はっきりとした鮮明な映像ではなく、全体的にソフトな映像になっていたように思う。柔らかい雰囲気を伝える工夫だと感じた。

番組のオープニングテーマの柔らかな音楽は昔から変わらない温かさがあり、安心感を与えてくれる。地味で寂しい感じもするが、これからも変えないでほしい。

（ＮＨＫ側）

「小さな旅」は、長年、アナウンサーがその土地を訪ねるというスタイルで制作している。地元の出演者との出会い方は、時代の変化とともに考えていく必要があるのかもしれない。

今回は撮影期間が１週間ほどあったので、じっくり撮影できた。その中で、天気にも恵まれて美しい桜の映像を撮影することができた。桜の色についても、できるだけ桜本来の自然な色を再現できるように力を入れた。

番組の音楽は、非常に特徴があって、さまざまな感じ方がある

と思う。別の音楽を使用すると問い合わせがくることもあり、心に響く音楽になっていると思う。

３つのエピソードは、ディレクターが、桜とともにある人の人生を描きたいと、かなり力を入れて取材をして見つけてきた。その思いが伝わっているとすれば幸いだ。

＜放送番組一般について＞

○　４月１３日(土) ＢＳ１スペシャル「カワイイが地方を救う！～東京ガールズコレクションの挑戦～」(ＢＳ１　後10:00～10:49)を見た。静岡県で開催されたショーで、静岡のフルコーディネートのファンションというコーナーがあり地域の活性化にもつながっていると感じた。女性のデザイナーや伝統を受け継ぐ職人などの紹介もあり、とてもよかった。このイベントを通して、女性の活躍する姿を発信でき、リーダーになる女性を増やすことにもつながるのではないかと思った。とてもいい番組だったので、ぜひまた放送してほしい。

○　４月２０日(土)ＥＴＶ特集「連合赤軍　終わりなき旅」を見た。連合赤軍事件から４７年。事件の記憶が薄れていく中、連合赤軍とは何だったのか、服役を終えた元メンバーへの取材を元に作られた番組だった。理想の社会を目指しながら、数多くの人々の命を奪うという大きな過ちを犯してしまったメンバーたち。番組を通して、元メンバーたち自身の思いと社会全体の思いのずれから起こった悲劇だったと感じた。ＥＴＶ特集は、いい番組が多いので、今後も続けてほしい。

○　４月２０日(土)「ＥＴＶ特集」を見た。当時のことを知らない世代にも何があったのか伝えるためにも必要な番組だったと思う。歴史の１ページの証人だった私たちが声を出しながら、後世に伝えていく、語り部であることが大事だと改めて感じた。

○　４月２０日(土)「ＥＴＶ特集」を見た。数多くの人々を奪った連合赤軍の元メンバーをテレビに出すこと自体に疑問をもった。過去の経緯を知らない人が見たら、連合赤軍について間違った思いを持ってしまうのではないかと心配になった。あやまちと反省している部分、生き方のギャップがあり過ぎて、中途半端になっていたのではないか。

○　４月２６日(金)東北ココから「じじいたちの“遺言”～住民帰還を目指した６年の苦闘～」は、福島県大熊町の元役場職員が中心の通称じじい部隊の活動を、長期

間にわたり丁寧に撮影したドキュメンタリーだったので、今回のようないい番組に結実したと思う。じじい部隊のメンバー６人は、大熊町の臨時職員という形で、土日も交代で避難先から１時間かけて通い、放射線量の高い用水路の点検や草刈りをしていて、その活動には頭が下がる。番組を通してたくさんの人に知ってもらえてよかったと思う。後を継ぐ若い職員が出てきて、その職員とのやりとりもほほえましくしく、そのような様子をさりげなく撮影できたのも取材の蓄積が生きているのだと思う。

一つ疑問に思ったのは、タイトルの“遺言”。後を引き継ぐ後輩たちへの伝言なので、“遺言”としたのだと思うが、タイトルとしてもっと適切なことばがなかったのだろうか。

○　４月２６日(金) きんよる秋田スペシャル「検証　平成の“人口減少”　令和へのメッセージ」（総合 後 7:30～8:15 秋田県域）を見た。人口減少が進む秋田県だが、希望あふれる前向きな内容でよかったと思う。人口減少に詳しい専門家が、秋田は恵まれた土地で、自然エネルギー自給が可能であることや、食品自給率が 100%を超えているなど、秋田に誇りを持てる内容が多かった。

番組の中で関係人口ということばを知った。移住ではなく、お互いが必要なときだけにその土地に移ってその土地の人口になるという考え方は新しく、今後に期待が持てると感じた。

平成から令和への時代の移り変わりに、秋田の一般の人たちのことばをたくさん取り上げた番組で、制作者の努力が伝わってきた。

○　４月２７日（土）ＮＨＫスペシャル「崖っぷち！？わが町の議会」を見た。全国の３万2,000人余りの地方議員を対象に大規模アンケートを行う画期的な取り組みだったと思う。「なぜこの人が？という同僚議員がいる」という問いに「いる」と答えた議員が70.4%。「議会は本当に必要か？と思うときがある」という問いに「そう思う」と答えた議員が72.5%など、地方議員の本音が明らかになっていた。

また、なり手不足の深刻さについてもよくわかった。大都市圏でも無投票の選挙区が続出しているという実態も浮き彫りになった。地方議員のあり方を考えさせられた問題提起型のよい番組だった。

○　４月２７日（土）「ＮＨＫスペシャル」は、地方議会に今たくさん問題があることを知らせるいい番組だったと思う。ただ、番組に登場した地方議員が、４月の統一地方選には関係のない方だった。選挙が終わってからの放送なので、なぜ今回の選挙に

関係のない方を取り上げたのか説明をしてもよかったのではないか。また、統一地方選挙の前に投票を促すような番組として放送してもよかったのではないかと思った。

番組でとったアンケート結果については、地方議員の方にも伝わるように公表してほしいと思った。せっかくいい番組をつくって、アンケートもしているので、その結果をきちんと当事者にも伝わるようにしてほしい。

（ＮＨＫ側）

結果はホームページで公表しているので、誰でも見ることができるようになっている。

○　４月２９日(土) 総決算！平成紅白歌合戦「第１部・第２部」(総合 後7:30～8:55, 10:00～11:30)を見た。歌唱の名シーンを中心に振り返った第１部と、ハプニングも交えて振り返った第２部、それぞれアクセントが効いていてよかったと思う。特に第２部は内村光良さんが司会で、ゲストに出川哲朗さんも出演していて、生放送でことばを選びながら話を進めるところがおもしろかった。歌は時代を映し出すことを改めて感じた番組だった。平成を振り返るさまざまな番組が放送されたが、今回の番組が一番平成を振り返ることができたように思う。令和でも紅白歌合戦は続くと思うが、新たな時代の紅白歌合戦にもぜひ期待したい。

○　４月３０日(火) ＢＳ１スペシャル 「沁(し)みる夜汽車」(ＢＳ１ 後10:00～10:50)は、５つの鉄道にまつわるエピソードで構成されていた。全て心が温まるエピソードで、涙がこぼれ落ちそうになる番組だった。平成最後の日の番組で、平成はこんなに温かい人がいたことがわかる、時代の変わり目にぴったりの番組だった。音楽やナレーションも番組にあっていてよかった。ただ、タイトルに夜汽車と入っているが、日中の話題が多く、夜汽車が出てこなかったのが気になった。心にしみるのは汽車や電車ではなく、夜汽車なのかと思いながら見た。

○　５月２日(木) インタビュー　ここから「サンドウィッチマン」(総合 前 6:30～6:53)は、仙台出身のサンドウィッチマンと仙台出身の千葉美乃梨アナウンサーという組み合わせで、東北愛を感じる番組だった。コンビ結成時から今までのさまざまなエピソードが、ＮＨＫの映像だけでなく、他局の映像も含めて紹介され、今までのことが手にとるようにわかる構成だった。

東日本大震災のときに、テレビ番組の撮影で気仙沼にいたという２人の気持ちをとても丁寧にインタビューしていた。震災から８年が過ぎて、課題が複雑化してきている今だからこそ必要な取り組みがあると思う。その取り組みがこの２人の力によって

さまざまな方面に広がることを期待したいと思った。

○　５月２日(木)「インタビュー　ここから」を見た。富澤さんがサラリーマンになった伊達さんにラブコールを送って３年かけてコンビを結成したが、その理由が、自分にないものを持っている、性格が全く違うところが魅力だったという点だったことに驚いた。ネタ作りの苦労について、富澤さんが新しいネタができたとき、「やっと書けた」ではなくて、「次はこれ以上のものを考えないといけない」という苦しみが常につきまとっているという話はとても印象に残った。

千葉アナウンサーの友人が伊達さんの親戚だという話もあり、親しみやすさが増した。ほのぼのとしたインタビューだったが、ところどころに笑いが入るところはさすがだと思った。

○　５月５日(金)「ムーミン谷への招待状」(総合 後6:05～6:43)を見た。「ムーミン」の作者のトーベ・ヤンソンのふるさと、フィンランドが紹介され、自然との共生や争いのない世界の大切さなど、物語のメッセージが伝わる番組だった。森の恵みの中でつくる家庭料理や家の雰囲気など、フィンランドの生活がアニメとリンクしている構成でわかりやすかった。

俳優の高橋一生さんの進行は落ち着いていてとてもよかった。スナフキンの声優もしているが、ぴったりだと思った。アニメ「ムーミン谷のなかまたち」は、ＢＳ４Ｋでしか見られないが、今回はそのダイジェストが見られてよかった。ＢＳ４Ｋの普及のためにもいい番組だったと思う。

○　５月５日(日) みちのく桜紀行「福島の桜」、１２日(日)「戊辰戦跡の桜」(ＢＳ４Ｋ 後8:00～8:30)を見た。ナレーションがなく、桜の映像と解説の画面表示だけで描かれていたが、非常にいい演出だった。「福島の桜」では、桜にちなんだ短歌と合わせて桜の映像を紹介していてすばらしかった。「戊辰戦跡の桜」は、アメイジング・グレイスが流れてぐっとくるものがあった。戊辰戦争で新政府軍に敗れた東北諸藩、その歴史を桜とともに振り返ることができる構成だった。

○　５月８日(水)クローズアップ現代＋「アーバン・イノシシ物語　ワシらが都会を目指すワケ」を見た。都市部で野生のイノシシが急増している背景が非常によくわかった。生息環境の変化がデータと映像、骨格標本などを使って解説されていて理解しやすかった。ただ、今後の対策について、ゲストがイノシシとの共存を図るべきと話していたが、それが根本的な解決につながるのか疑問に思った。今後の対策があやふや

に終わってしまったので、もっと深く追求してほしかった。

○　５月１１日(土) ＥＴＶ特集「傷ついた故郷と向き合う～熊本地震３年　南阿蘇村～」を見た。東日本大震災について被災地以外の人たちが忘れているように、熊本地震についても忘れてしまっているのだと感じた。番組の中で「熊本地震からまだ３年。３年で変わるわけがない」ということばがあったが、そのとおりで、３年で再建はできないと思う。そのことばが東日本大震災の８年でもまだ再建には至らないということと重なって見えた。

○　５月１２日(日)ＣＯＯＬ　ＪＡＰＡＮ～発掘！かっこいいニッポン～「結び～ｔｙｉｎｇ～」を見た。結びが、日本独特の文化だということに初めて気づかせてくれた番組だった。外国人がかっこいいと思う結びを紹介していたが、水引や風呂敷、お守りやおでんの昆布などさまざまな結びが取り上げられていた。

さまざまな国の出身者が違う目線で日本の文化について意見を語っていて、本当に興味深かった。外から見た日本のよさを知ることで、改めて日本の文化に自信を持ち、自分の国を好きになれるような番組だと感じた。また、日本の文化をきっかけに、ほかの国の文化も知ることができるのもこの番組のよさだと思った。

○　５月１４日(火) サラメシ　シーズン９「第５回」は、とてもおもしろい番組だった。航空自衛隊の静浜基地での取材で、パイロットを目指す候補生の訓練の様子も紹介されていた。基地の食堂では、月に１回、全国の郷土料理を出していて、今回は鹿児島の鶏飯だった。自衛隊は転勤が多いので、食事を通してふるさとを思い出してもらいたいという気配りがすばらしいと思った。食事を作っている人の思いも想像しながら見ることができた。

○　４月から新しいバラエティー番組が始まったが、いろいろな角度から作っていて感心している。「ＮＨＫ杯　輝け！！全日本大失敗選手権大会～みんながでるテレビ～」はおもしろい番組だと思う。芸能人が自分の失敗談を話すという番組はあるが、一般の人が自分の失敗を赤裸々に話すという時代が来たのかと驚いた。「実験バラエティー 規制解除！アンロック」は、世の中の“規制”を外すとどうなるか実際に実験をやってみる番組。タイトルが仰々しく、大上段に構えているように感じるが、内容はそれほど思い切ってやっているように見えず、ニュアンスの違いを感じた。これからのブラッシュアップに期待している。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０１９年４月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１８日(木)、ＮＨＫ仙台放送局第１会議室において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、「大好き♡ 東北 定禅寺しゃべり亭」を含む新年度の新設番組、リニューアル番組を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、５月の番組編成の説明、放送番組モニター報告と視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

（出 席 委 員）

委 員 長	津田　政克	((株)七十七銀行　常務取締役)
副委員長	藤村　ゆき	((株)健康米味楽農場　代表取締役)
委　　員	相原　和裕	(河北新報社　論説委員会委員長)
	桂木　宣均	(日本地下水開発（株）　代表取締役社長)
	坂田　裕一	(ＮＰＯ法人いわてアートサポートセンター 理事長)
	佐藤　美嶺	(防災士)
	鷹山　ひばり	(七戸町立鷹山宇一記念美術館　館長)
	西内　みなみ	(桜の聖母短期大学　学長)
	長谷川　登	(東北電力株式会社　取締役　常務執行役員)
	山田　理恵	(東北電子産業（株）　代表取締役社長)

(主な発言)

＜「大好き♡ 東北 定禅寺しゃべり亭」を含む新年度の新設番組、
リニューアル番組について＞

○　４月６日(土)～村上弘明さん～と１３日(土)～林家たい平さん～の２回を見たが、視聴者との距離が近い番組だと感じた。ゲストの名札を観覧に来た一般の人が書く演出がとても斬新で、会場との一体感を生むいいきっかけになっていた。

番組の前半を見ただけでは、ほかのトーク番組との違いをあまり感じられなかったが、後半でゲストの東北への思いが描かれていて、仙台放送局が制作する大きな意義があると思った。

気になったのは、ゲストが登場したあとに上を見上げる場面で、映像ではそちらの様子が映らない。２階の観覧者を見たのだと思うが、仙台放送局に一度も来たことがない人は、状況が分からないので不親切だと思った。

東北地方向けの番組だが、街頭インタビューなど宮城県で撮影されることが多いように見えた。東北各県の人にも親しみを持ってもらう工夫が必要ではないか。

○　６日のゲスト、村上さんについて、岩手県陸前高田市の出身で、津波で流された実家のあとが映像で紹介されたり、医学部を目指して仙台で浪人生活をしていたが名画座に通いすぎて、俳優の道に進んだというエピソードなど非常に親しみを感じた。１回目のゲストとしてとてもいい人選だったと思った。

仙台で活躍するイラストレーターが描いたゲストの似顔絵を番組内で紹介しているが、一つのアクセントになっていてよかった。

復興めしのコーナーでは、ステージ上で試食をしていた。中央の小さなテーブルに集まって立ったまま食べていたが、あまりいい見栄えではなかった。また、テーブルに清涼飲料水の容器がそのまま出されているが、グラスに出すなど見せ方に工夫が必要だと思った。

司会は、安定感のあるフリーアナウンサーの石澤典夫さんと明るい森下絵理香アナウンサーで好感が持てた。タレントのウド鈴木さんも賑やかすぎるところもあるが、場を和ませて盛り上げていたと思う。今後も期待したい番組だ。

○　６日の放送は、初回ということもあり、進行がスムーズではないと感じた。ゲストの村上さんに過去に演じた特撮ヒーローの変身ポーズをやってほしいと突然お願いをする場面は、あまりいい印象を受けなかった。また、学生時代の話や名画座の話はおもしろいエピソードではあったが、トークの時間が長いと感じた。生放送の番組なので、仙台だけでなく、東北各地のリアルタイムの映像を出すなど、トークの部分を減らしてもいいのではないか。

また、復興めしのコーナーで試食をする際、映像がアップ過ぎると感じた。人の食べている顔はそれほどアップにしなくてもいいのではないか。

１３日は、たい平さんがゲストだったが、話がとてもおもしろく、時間が短く感じられた。２回目は１回目よりもかなり落ち着いていて進行もスムーズだったので、今後ますますよくなることを期待している。

○　６日のゲストが村上さんになった理由がはじめは分からなかったが、話が進むうちに、東北の人らしい誠実でひたむきな役者だということが伝わってきた。東日本大震災をきっかけにふるさとに対して、気持ちを寄り添わせて、いろいろなことを一生懸命やっていることが分かった。１回目のゲストにふさわしい内容で感動した。

ただ、会場にいる観覧者とテレビを通して見ている私たちの間に距離感を感じた。例えば、村上さんにヒーローの変身ポーズを突然お願いした部分は、会場にいた人は

喜んだと思うが、テレビを通して見ている人は、ここでやらせなくてもいいと感じたのではないか。視聴者の立ち位置がどこにあるのかも考えて進行するともっとよくなるのではないか。

○　番組の進行を４人でしているが、その役割が明確になっていないと感じた。見栄えをよくするためだけなのか、進行する上でもっと有効な役割分担をしていくべきだと思う。また、番組の内容も取材が足りないのか、番組の構成がうまくいっていないのか、村上さんの人生に迫るような深い話を聞くまでに至っていなかった。東北に対する思いをもっと引き出してほしかった。

　また、街頭でゲストについてインタビューするコーナーがあったが、ねらいが分からなかった。なくてもよかったのではないか。

　出演者のメイクも気になった。白く粉を吹いているように見える人がいたので、もう少し気を遣ってほしい。

　今後も東北にゆかりのあるゲストに呼んでほしいと思った。東日本大震災についても忘れずに番組をつくってほしい。

○　生放送の番組で、ゲストの話をゆっくり時間をかけて聞き出すと、いろいろなおもしろいエピソードが出てくるものだと感心しながら見た。村上さんとたい平さんの被災地支援について、２人の東北を応援したいという思いが伝わりとてもよかった。今後のゲストにも震災の話題を聞くと思うが、あまり限定しすぎなくてもいいと思う。東北への応援メッセージや東北にまつわるエピソードを話してもらうだけで、東北は応援されているという安心感が伝わっていくのではないか。

　出演者がつけているマイクが、見ていて違和感があった。もう少し目立たないものにできないのだろうか。また、ステージのセットもあまり洗練されていない印象だった。特にゲスト席の背景にコンクリートのブロックのようなものが映っていて、何だかよく分からなかった。

○　トーク番組を左右するのは司会者だと思う。ベテランの穏やかな雰囲気の石澤さんと明るいウド鈴木さん、森下アナウンサーの３人でとてもいいと感じた。生放送の公開番組という緊張感がある中で、それをあまり感じさせない番組進行はすばらしかった。

　出演者の紹介のための画面表記に、ウド鈴木さんは「山形県庄内の出身」、森下アナウンサーは「仙台２年目」など東北とのゆかりについて表記していたが、今後も工夫して続けてほしいと思った。

　「復興めし」というコーナーがあるが、被災地の食べ物を中心に紹介するような印

象を受けるコーナー名になっている。被災地以外の食べ物も紹介できるような名前にしてもよかったのではないか。

テーマ音楽が明るく弾むような感じがして、印象に残りやすいと思う。たくさんの人が口ずさむような番組になってほしいと思う。

○　１３日のたい平さんがゲストの回は、たい平さんの妻が仙台の出身だという話や石巻とのつながりの話などが興味深かった。

東北で放送する番組なので、震災の話をどのように伝えていくかは大きな課題だと思う。あまり重くならない程度に、震災の話題は入れていくべきだと思った。東北出身のゲストではなくても、３月１１日に何をしていたのかなど、被災地とのつながりを感じさせる内容を入れれば、よりよい番組になるのではないか。また、復興めしのコーナーはとてもいいので、もう少し長い時間をとってもいいと思った。東日本大震災を風化させないためにも、今後も努力を続けてほしい。

出演者がつけているマイクが気になった。もう少し目立たないものにできないものか。

○　６日のゲストの村上さんは、東北の地元愛にあふれていて、特に津波で流された実家のあとの映像を見ながら話す場面では、全国放送ではなくて東北で放送する番組だからこそ語ることができる内容だったと感じた。一言一言ことばを選んで話しているのが印象的だった。

１３日のゲストのたい平さんは、東北とのつながりが全く想像できなかったので、ゆかりのある石巻の話などは感動しながら見た。番組が短く感じるほど話に聞き入ることができた。

ウド鈴木さんが、ゲストの印象を聞く街頭インタビューは、番組スタッフが聞く場合にはない効果があるのか。

この番組は、ちょうど昼前の忙しい時間に放送されるので、ずっと画面を見るというよりも、昼の準備をしながら見る人も多いと思う。それでも、きちんと話が入ってくる構成になっていたと思う。

番組の中で、ゲストの似顔絵を紹介していて、放送後に仙台放送局の１階に飾っていた。サインも書いてありとてもいいので、番組の中で実物を見られるということを紹介した方がいいと思う。

○　司会者や出演者の紹介を「山形に赴任経験あり」、「仙台２年目」など東北にゆかりのあることを強調していた。番組がいかに地域密着なのかを表現していると思うが、やや無理をしている感じがした。また、公開生放送で多くの視聴者に囲まれた番組ならではの新鮮さ、いい意味での手作り感にあふれた番組だった。

普通のトーク番組に終わらないで、もっと魅力ある番組にするには何かもう一ひねりほしいと思って１回目を見たが、２回目に「行列のできる たい平相談所」というコーナーが作られていて、会場に来ている視聴者を巻き込んで全体を盛り上げていた。ゲストに合わせて演出を工夫することでもっとおもしろくなるのではないか。

身近に直接行って見られる番組があるということは、非常に貴重なことだ。明るくさわやかな印象と震災の話題もあり、今後に期待が持てる番組だった。

（ＮＨＫ側）

２階の観覧者を見るゲストの目線については、会場に来たことのない人に分かるように改善していきたい。

出演者が付けるマイクは、トーク番組としては違和感があるかもしれない。外の音が入りやすい場所で放送しているので、普通のピンマイクでは雑音を拾ってしまうため、指向性の高いマイクを使っている。

一般の方がゲストをどう見ているかを街頭インタビューしているが、参加感を出し、地域の番組ということを全面に出す狙いがある。番組スタッフがインタビューするよりもウド鈴木さんが直接聞くことで親近感も出て、答えてもらいやすいという効果もある。

「復興めし」は、今、希望を持って前向きに活動している人にスポットを当てて、それをグルメという切り口で紹介するようにしている。

ゲストも東北出身者だけを呼ぶのではなくて、東北を応援してくれる接点を持っている人を呼ぶのが理想。東北にゆかりのある司会者が、今まで気づかなかった東北の魅力をゲストや視聴者、そして会場と一緒に気づいていけるような番組にしていきたい。

○　４月３日(水)「もりすた！」を見た。東北の観光名所の情報をまとめて紹介していてとてもよかった。福島の桜フォトコンテストについて一番見たいと思っていたが、限定された情報しかなかったので残念だった。ＮＨＫ福島放送局が、パリとロンドンでも桜フォト展を開催したという動きについても紹介があるとさらによかったと思う。

○　４月１１日(木)「もりすた！」を見た。魚市場からのリポートがあったがとても楽しい内容だった。旬の魚を紹介していたが、何回もリハーサルをして、撮影の角度や人の動き、読み上げる文章などを入念に準備しているように感じた。水産会社の広報

の女性が説明をしていたが、とても聞きやすかった。ちょうど昼どきの放送なので、旬の食材を紹介するにはうってつけだと思った。

○　４月１１日(木)「もりすた！」を見た。お昼前の時間帯に１５分間という短い時間で非常に見やすかった。東北の旬の話題を、いくつか紹介していたが、内容がよくまとまっていたと思う。ただ、残りの開催期間が１週間ほどのイベントも紹介されていて、旬とは言えないのではないかと思った。もっと旬の話題を厳選して取り上げてほしい。司会の女性キャスターは、頑張っているのは分かるが、原稿を読み間違えることがあり聞き取りにくい部分があった。今後に期待している。

○　４月１１日(木)「おはよう宮城」を見た。ニュース番組なので、簡潔な内容を大きな文字で表記していて、見やすいと感じた。リポートで、山形の花小路にある飲み屋を取り上げていたが、朝の８時前に放送するにはふさわしくないのではないかと疑問が残った。

＜放送番組一般について＞

○　３月２５日(月)から２８日(木)「ひよっこ２」(総合後 7:30～8:00)を見た。２年前に放送した連続テレビ小説「ひよっこ」の続編で、久しぶりに登場人物に再会したような気持ちになり懐かしさを感じた。みね子の妹のちよ子が高校２年生で自分の進路に迷う中で、家族が支えていくシーンに感動した。ドラマ全体が、アットホームで明るく、音楽も場面ごとにぴったりはまり、増田明美さんの語りもすばらしく、視聴者に元気を与えてくれる内容だったと思う。「ひよっこ３」も見てみたい。

○　３月２５日(月)と２６日(火)「落語ディーパー！～東出・一之輔の噺（はなし）のはなし～」は、古今亭志ん生の特集で、「風呂敷」と「火炎太鼓」という有名な演題だったので期待して見た。生前の志ん生の高座の映像が出てくると想像していたが、映像はあまりなかった。ＣＤなどで音声はよく聞くが、しぐさや表情を映像で見たいと思っていたので拍子抜けした。映像が残っていなかったのだとすると、志ん生の落語作品を中心にしてテレビの特集番組にするのは、難しかったのではないか。作品のあらすじや解説、志ん生への称賛に重きが置かれていて、肝心の志ん生落語の魅力はうまく伝え切れていなかったように感じた。

○　３月２７日(水)旬感☆ゴトーチ！「憧れの町　銀座の楽しみ方～東京　中央区～」

を見た。民放でも昼の時間に旅情報を扱っているが、首都圏の情報に偏りがちのように思う。ＮＨＫは全国の放送局からの発信も多く、全国各地の話題を紹介できるところが強みだと思っている。その強みを発揮できる数少ない番組の一つだったが、今回が最終回だった。生放送で、現場とスタジオのやりとりや台本どおりにいかないようなハプニングもあって、おもしろい番組だと思っていたので、非常に残念だ。特にスタジオのゲストが視聴者目線で突っ込みを入れる演出が身近に感じられてよかった。今後またこのような番組が作られることを期待したい。

○　３月３０日(土)天皇　運命の物語第４話「皇后　美智子さま」(総合 後7:30～8:43)は、美智子さまの６０年間の歩みを描いていたが、すばらしい映像だった。その努力するお姿が、国民を安堵させてきたのだと番組を見ながら改めて思った。

○　３月３１日(日) ＮＨＫスペシャル「イチロー　最後の闘い」は、引退を発表して１週間という短期間での放送で、とてもすばらしいと感じた。「王道に近道なし」、「一打に心血を注ぐ」など、イチローの数々のことばは、涙なくして聞いていられなかった。イチローはさまざまなことに果敢に挑戦し、普通の人には出来ない生き方をしているので、人の心に響くことばを持っているのだと改めて感じた。

○　４月２日(火) 先人たちの底力　知恵泉（ちえいず)「立川談志のダンディズム（前編）常識にかみつけ」を見た。立川談志は、破天荒な言動や反骨精神というイメージが強いが、古典落語の名人で、伝説的な明言を数多く残している。番組の中で、弟子に対して「俺を誰だと思っているんだ」ということばが紹介されたが、才能のある落語家が人一倍の努力をして、古典を磨き上げていった自負から生まれたことばだと捉えると、違った響きになると思った。表面的な言動だけ見ると傲慢と捉えられてしまうが、その根底には落語への真摯（しんし）な態度があった。そこをもう少し掘り下げて描いてもよかったのではないか。

　また、「知恵泉」というタイトルはもう少し工夫が必要だと感じた。視聴者が見て疑問を抱くタイトルはあまり好ましくないと思う。わかりやすくて誤読されない、できれば訴求力のあるタイトルがいいと思う。

○　４月５日(金)東北ココから「四・季・彩　～光あふれる　みちのくで～」は、映像がとてもきれいで、見ていて幸せな気持ちになる番組だった。「四・季・彩」という題名なので、春夏秋冬の順番で構成されると想像していたが、冬から始まっていた。雪深い東北にとって特別な春を感じさせる流れになっていた。雪の白と桜のピンク、それから新緑の黄緑が混ざり合う風景は、東北の人にとっては毎年当たり前に

見る春の風景だと思うが、映像作家の永川優樹さんの「ここにしかない風景」というコメントがあり、東北の風景を誇りに感じることができた。

特に心に残ったのは、夏の大曲の花火師のエピソードだった。フランスのシャルトル大聖堂からインスピレーションを得て新しい色を生み出す、伝統を大事にしながら新しさを生み出そうとする姿が印象的だった。

ナレーションは俳優の佐々木蔵之介さんと永作博美さんのゆっくり丁寧な語りで、ぜいたくな時間を過ごしている気分になる番組だった。

○　４月６日(土)ＮＨＫスペシャル　平成史スクープドキュメント第６回「東京　超高層シティー　光と影」を見た。東京で平成に完成した超高層ビルは１００棟に迫り、さらに建設が進んでいるということで驚きながら見た。丸の内と六本木ヒルズの民間の２つの再開発がターニングポイントになり、国が高層都市化へと大きく舵をとっていったことが明らかになった。企業側からの働きかけもあって、国や都が動いたことは確かだが、そういった機を逃さないという企業の本質が垣間見られて勉強になった。丸の内は皇居が近いから高いビルがつくれないと聞いていたが、その規制がいつ撤廃されたかという点はもう少しきちんと説明がほしかった。

○　ＮＨＫスペシャル「東京　超高層シティー　光と影」を見た。丸の内の超高層化は、東京駅の上部空間の権利を周りの高層ビルに売るということで実現したことだったことに非常に驚いた。ただ、東京は発展をするかもしれないが、人口の一極集中にもつながるということもよくわかった。東京一極集中になることで、地方はどうなるのかという点についてもさまざまな意見が紹介されたのでよかったと思う。

地震大国の日本が香港やシンガポールと競争するには、地震に強い建物を作っていかなければいけない。経済の中心がほかの国へ持っていかれる危機感、日本の今後を改めて考えるという意味では非常にいい番組だった。

有馬嘉男キャスターが、落ち着いた感じで、ゲストに鋭く切り込んでいてとてもよかった。

○　４月８日(月)うまいッ！「春なので…、たらの芽～山形県・金山町～」は、とても楽しい雰囲気が伝わる番組だった。料理研究家がたらの芽をふんだんに使う料理を紹介していた。たらの芽はそれほど安い食材ではないので、もう少し一般の人でも手が届きやすい食材をメニューにしてもよかったのではないかと感じた。

○　４月９日(火) すイエんサー「ガールズバトル２０１９　アウトドア料理編」は、

先輩チームと新人チームでどちらが高得点をとれるか、火おこしと料理で競うという内容だった。空のライターや火打ち石を使って火をおこしていたが、子どもたちがいろいろ考え、自分たちでヒントを発見したときの喜びの表情がよく撮れていたと思う。視聴者も一緒に考え、一緒に発見できるような演出になっていたので、楽しみながら見ることができた。

○　４月１０日（水）歴史秘話ヒストリア「日本人の夢をつくった男　小林一三の逆転人生」を見た。電車通勤や駅直結の百貨店、少女歌劇に住宅ローンといった日本初のビジネスアイデアを数多く考案した阪急電鉄の創業者・小林一三の人物像を描いていた。さらに、休日に家族が映画を見たり、百貨店で買い物や外食をするといった、現代につながる日本人の生活スタイルも創造したということで、その独特な発想に驚きながら見た。とにかくそのアイデアと庶民に対するサービス精神がすばらしく、現代でも参考になる部分があると思った。

○　４月１２日(金)きんよる秋田「伝説の杜氏　もう一つの物語」は、３月４日(月）プロフェッショナル　仕事の流儀「踏み出す勇気、終わりなき革命～杜氏・高橋藤一～」を再構成した番組だった。普通であれば企業秘密として見せないような機械なども見せていていたので驚いた。高橋さんが「自分の手がセンサーだ」と話していて、それだけ自分の手に自信があるからこそ蔵の中を見せ、酵母菌の話なども惜しみなくしたのだと思った。秋田県だけ「プロフェッショナル　仕事の流儀」をさらに深くした番組を放送してもらい、ぜいたくな時間をもらった気がした。

○　４月１３日(土）有吉のお金発見　突撃！カネオくん「“すしネタの王様”マグロのお金の秘密」を見た。財布の形をしたカネオくんというキャラクターと出演者が掛け合いをしながら進行する番組で、キャラクターがいることで視聴者との距離感が縮まる効果もあるのだと感じた。

今回は、マグロをテーマにしていた。高額で取り引きされているイメージだったので、釣った人はとてももうかるのだと思っていた。しかし、船や機材、燃料費などの経費がかかるので、それほどもうかっているわけではないことが分かって興味深かった。さまざまなテーマを取り上げるようなので、今後も楽しみな番組だ。

○　４月１３日(土)ＮＨＫスペシャル　ＡＩに聞いてみた　どうすんのよ！？ニッポン第４回「超未婚社会」を見た。

今回のテーマは「結婚」で、結婚をしていない人の９割はしたいと思っているとい

うことだった。長寿県の沖縄の例を出しながら、不健康というリスクが危機感をあおり結婚率を上げるという解析結果が出た。危機感が人とのつながりを求めるという仮説はかなり信頼度が高いのではないかと思った。
結婚しない人の５割は交際相手が見つからないという理由を分析した結果、家電量販店の存在が出会いを促進するという結果が出て興味深かった。また、愛媛県で、ファッションを隠した婚活パーティーだとカップルの成功率が３倍になったという事例報告も興味深かった。
　少子化は、国が人口に見合った暮らしを創造していけばいいという司会のマツコ・デラックスさんの話に共感した。

○　４月１３日(土) ＮＨＫスペシャルを見た。「結婚しなさい」ではなく、結婚したい人がどうすれば結婚できるかというアイデア、ヒントからスタートしていてよかった。おもしろいと思ったのは、男性は、結婚する人としない人の意識や生活習慣がきれいに分かれているが、女性はばらばらで、女性自身がどうしたら結婚できるかがわからない。それがアンケートとしてあらわれていて興味深かった。
　国が本当に結婚を推奨したいなら法整備をするべきだなど、マツコ・デラックスさんの意見がとてもわかりやすかった。これから日本をどうするかを考える示唆的で、とてもためになる番組だった。

○　４月１３日(土)ＥＴＶ特集「すぐそばにいる他者の物語」は、視覚や聴覚、ＬＧＢＴなど「生きづらさ」を抱える６人が、演劇に出演し、自らのことばで語り、お互いを発見していくノーナレーションのドキュメンタリー番組だった。オーディションで選ばれた人が本番を迎えるまでの葛藤を描いていたが、見応えがあった。他者を社会が受け入れない苦悩と向き合っている人たちを上手に捉えていた。ただ、公演を見た観客の視点がなかったのが残念だった。

○　４月１３日（土）沁（し）みる夜汽車「卒業へのメッセージボード～三陸鉄道　久慈駅～」(BS1 後9:35～9:45)を見た。７年前から、毎年３月に卒業する高校生に向けて、久慈駅の駅長がメッセージボードを書いて駅に掲示してきた。その駅長がことし異動のため久慈駅を離れることになり、７年間の思いが詰まった最後のボードだった。卒業式の後にボードをじっと見つめる高校生の表情や写真に残す高校生の姿が印象的だった。最後にボードの内容を朗読する場面があったが、音楽ともマッチしていてとてもすばらしかった。心に残る番組だった。

○　４月１４日(日）に再放送された「『蜜蜂と遠雷』若きピアニストたちの１８日」(Eﾃﾚ 後2:30～3:29)は、恩田陸さんの小説「蜜蜂と遠雷」のモデルになった浜松国際ピアノコンクールの2018年１１月の大会に密着した番組だった。コンクールに参加する４人の若き演奏家が厳しい現実に押しつぶされそうになりながらも成長していく姿が描かれていた。わずか１０分間で３台のピアノの中から自分が演奏するピアノを選ばなければいけないなど、厳しい条件についてもうまく解説されていて、どんどん引き込まれていく構成になっていた。カメラワークも非常にすばらしく、天井、横、背後など、さまざまな角度から撮影されていて多角的に演奏の様子が伝わってきた。コンクールで観客がいるのにもかかわらず、それを撮影できたことはすごいと思った。恩田陸さんの「蜜蜂と遠雷」を読んでみたくなった。

○　４月１４日(日)に再放送されたアニメ　へそまがり昔話（Eﾃﾚ 後 4:00～4:57)を見た。赤ずきんやシンデレラなどが登場するが、一般的に知られている物語とは全く違うストーリーになっていた。子どもに見せるには残虐すぎる映像もあり驚いた。Ｅテレは、子どもも多く見るので、それにふさわしい内容を吟味してほしいと思った。

○　連続テレビ小説「なつぞら」を見た。連続テレビ小説の 100 作目ということで、主役に人気の俳優の広瀬すずさんを起用するなど、今回の作品にかけるＮＨＫの意気込みを感じた。主人公の幼少期を演じる粟野咲莉さんの演技や草刈正雄さんの渋い演技などとても見応えがあると感じている。今回は原作やモチーフのないドラマで、今後の展開が読めないが、北海道の美しい自然の中で、さまざまな課題を周りの人と力を合わせて乗り越え、視聴者に元気を与えるドラマになるのではないかと思う。今後の展開が楽しみだ。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局